

碇泊中軍艦旗は、午前八時に揚げて日没時に降下するのである。此の軍艦旗と云ふのは陸軍で云ふ聯隊旗の様なもので非常に可重に取り扱はれ揚降に就ては唳唳たる「君が代」の吹奏裡に行はれる。此の時衛兵隊は捧銃の敬禮を上甲板に在る一同は軍艦旗に向つて舉手注目の敬禮を行ひ其の他に在る者は姿勢を正して敬意を表するのである。毎日のことながら其の部度々に崇高の氣四方に漲り只皇恩の有り難さに頭下れば今更ながら秋津島根に生れた事が喜ばしい殊に波上畏くも陛下の御英姿を拜し奉る心地になつて彌が上にも軍艦生活の幸福を泌々と感ずる。

(ロ) 艦内作業。艦内作業とは艦内に於て海兵として必要な作業を爲すを云ふので之はいざ鎌倉と云ふ時には如何に小なる落度と雖も引いては戦局に偉大なる影響を及ぼすので何時如何なる場合でも寸毫の差支を生じない様に平素から艦内兵器機械等の手入を完全に爲し置くを云ふので有る。

艦長は之等を監督する爲め自ら時々現状の點檢を行ふのである今其の種類の主なる

もの擧ぐれば左の通りである。

(一) 分隊點檢。艦長が各分隊に就て容儀服装等を點檢するのである。

(二) 人員調査。大概月に一回月曜日の午前に艦長が乗員の動作、姿勢及び敬禮等を檢

閲するのである。

(三) 艦内點檢。艦内の各部を巡視して其の整頓を點檢するので通例艦長が行ふのである。

(四) 倉庫彈藥庫點檢。艦内點檢に略ぼ同じ。

(五) 武器點檢。大砲、水雷、探照燈、信號器具等艦内に於ける總での武器に就て其の保存手入等を點檢するので有る。

(六) 銃器點檢。小銃拳銃が其用途に向つて何時にても間に合ふ様完全に手入が行き届いて居るか否かを點檢するのである。

以上の外軍事點檢、被服點檢、釣床點檢、寢具點檢、短艇點檢及び甲板要具等の

點檢が有る。

次に軍艦に於ける教育、作業等を了知する資料として週課表を學ぐれば左の通りで有る。

軍艦週課表

日	曜	日	曜
月	曜	日	曜
火	曜	日	曜
水	曜	日	曜
木	曜	日	曜
金	曜	日	曜
土	曜	日	曜

日課手入終て休養

被服縫繕

分隊點檢、人員調査、艦内點檢、精神教育、諸法規説明、被服點檢

被服洗濯、防水教練、部署教育、補修教育

基本教練、應用教練、部署教育、補習教育

寢具乾方、寢具點檢、銃器點檢、部署教育、補修教育、兵器手入

被服洗濯、帆布具洗濯、船體兵器手入

防火教練、艦内大掃除、艦内諸部手入整頓、短艇點檢、甲板要具點檢、被服縫繕

(ハ) 教育訓練

軍隊教育の主眼とする所は、國家有事の際勇往邁進以て皇軍に仍なす敵を破り萬世不朽なる我が帝國をして泰山の安きに置くべき大任を完ふするにあるので如何に尨大な軍艦を浮べ精巧な武器を備へていても之を取り扱ふ將卒の技倆に於て精神に於て缺陷があつては一朝事有る時に何の用にも立たぬのである。吾々は假令艦艇や武器が敵に對し多少の遜色が有つても之を操縦する將卒が敵に優る數段の技能及び精神を持つてをれば中々引けを取るものではない。之れ日清日露の兩役に於て萬人の普く知る如く明に歴史の證明する所である。故に苟も帝國の軍人である以上は平素から訓練を重ね餘念なく精神及び技倆の鍛練に努力せねばならぬ。

我が海軍に於ける教育は精神教育、基本教練、應用教練及び部署教育、補習教育に分つて居る。就中精神教育は軍隊教育の根本であつて最も重要視されて居る。基本教練は乗員一般に課せられる教育で應用教練は基本教練を實際的に應用する教

練である。

補習教育は各兵種に應じて夫々必要な智識技能を補習さすものである。基本教練につき其の主なる部署の概略は左の通りである。

(一)臨戰準備。之は出征前必ず施行すべき事であつて戰時必要な兵器、彈藥及び軍需品等を充實し且つ不要の物件を陸揚する等其の他戰鬪の必要な種々の準備をするのである。

(二)合戰準備。之は愈々敵と接觸するに先ち臨戰準備に加ふるに更に戰鬪に必要な諸準備を完成するので各自夫々受持の配置に就き何時にても戰鬪を開始し得る様に準備をするのである。

(三)戰鬪教練。之は合戰準備に加ふるに更に實際戰鬪に必要な諸準備であつて戰鬪能力を完全に發揮し豫ねて練磨の武力を試すは正に此の時である。即ち勇ましき戰鬪の號音と共に全員其の部署に就き敵の軍艦、砲臺等を砲撃し(旅順及青島戰に於ては陸軍

砲類又は市街等を)又は敵艦に對し水雷を發射し或は飛行機を以て潜水艦の來襲を警戒する等全員舉つての大活動をなすのである。而して夜間は上甲板の電燈を全部消し鐵窓を堅く閉ぢて艦外に一點の燈光をだに漏らさぬ様にして大砲は射擊準備を整へ探照燈は點燈準備を整へて敵の驅逐艦、潜水艦及び水雷艇の襲撃に備へ敵から水雷を撃たれぬ前に敵を撃破するのである。故に其の動作は最も迅速機敏且つ確實たるを要するのである。

(四)陸戰隊。陸戰隊の目的は敵の一地點を占領して陸軍の揚陸を掩護し或は陸上營造物及び軍事的設備の破壊占領其の他居留民保護又は敵地の占領及び守備等に任ずるのである。陸戰隊は一艦より派遣せらるゝ事もあり又は數艦聯合して派遣することもある。彼の青島に於ても我が第二艦隊は龍口、勞山灣及び勞山港に陸戰隊を揚陸せしめて陸軍の揚陸掩護等に任じ又獨領南洋群島も最初陸戰隊が占領し引き續き守備隊として一時占領地の守備に任じたのである。

其他平時又は戰時に於て大要左の如き各種の部署がある。之は基本教練に依つて毎日訓練せらるゝのである。

艦内哨戒。敵艦捕獲。商船臨檢拿捕。掃海。短艇軍裝。見張。潜水。彈藥搭載。難船救助。航空機防禦。總員乗艇。防火防水。防火隊派遣。溺者救助。出入港。錨般出。艦艇横付。

「備考」 以上は改正審議中なるが故に多少の變化を見るであらふ。

(二) 日本漫遊

之から日本沿岸航海の飛び立つ様な最も面白い所を御紹介してみよう。日本沿岸航海と云へば北は氷山流るゝ千島樺太から南は臺灣澎湖島に至る迄で流汗淋漓たる三伏の暑さに白雪を頂ける山、大海に氷山のウキ／＼と流れて來るを見嚴冬に白衣一枚の輕々しい姿をも見ることが出来る。先づ僕の軍港附近から始めよう。僕の軍港と云つたら御承知の吳で有る今しも吾が乗る艦の煙突よりは黒煙騰々と立ち上り前日來上陸

を許されて居た千餘の乗員は唯一人として期を違へずに歸艦し夫々擔當の業務に就き浮標に繋げる錨鎖に已に索條に換へられ汽艇端舟は已に悉く引き揚げられ幾萬馬力を出す蒸氣は沸々汽罐の内に蒸成せられ種々の機關は運轉を試みられ命令一下活動を開始せんとして艦魂已に宿された。

艇て午前八時甲板上に嚙々たる君が代」の奏樂が起る乗員千餘の最敬禮の裡に紅鮮かな大軍艦旗は嚴かに艦尾の旗竿高く揚げられた次で彩旗數旒艦の桁端に翻りて下ると見るや出港を令する嚙々たる喇叭の音は艦内港内に響き渡り乗員は疾驅して瞬時に皆己が部署に就き見る／＼番兵塔は取り拂はれ舷梯は揚げられ左右に突出せる長き繫艇桿は舷側に收められ其の他有らゆる出港作業は忽ちに行はれて浮標を離ると見る内に壯嚴なる軍艦マーチの奏樂起り悠々然として不動富嶽の如き鐵城は動き始めた。朦々天を焦す黒煙うら／＼かな朝日に光り、吹く潮風に斷雪翻る軍艦旗、紺碧の水を切つて進む艦の後長く引く白浪の裾嗚呼壯なる哉快なる哉、雄觀實に慘夫をも奮起せ

しむべく婦女をも勇奮せしむべく過去幾戰役に我が艦隊が此の軍港に纜を解いて征途に上つた當時を懐ひ起さずには居られない。

「船頭可愛や音戸が瀬戸よ一丈五尺の櫓がしはるよう」遙かに流す追分の長閑な節を聞き残し世界の海の公園と歐米諸國に賞はるゝ瀬戸内海に出て見れば幾多の島嶼散在し春は島山霞にてさも天上の浮島の雲に漂ふ如くなり啼く黄鳥の聲さへも天女の歌かと疑はれ波靜かにて鏡爲し夏青々と生ひ繁り秋は紅葉の寒霞溪肥馬高天に嘶けば源平須磨の戦に熊谷次郎直實が青葉の笛の物語實に情ある武夫の昔を語る浪の音問はゞ答へん老松が千變萬化極みなく真砂の上に青々と枝を交ふる麗はしさ天女の如くはでやかに舞子の袖のひらくと松葉がくれに明石までつゞく松原美しや。九郎判官義経や辨慶一派にかためたる東男の武者が蹄の跡の一の谷。駒を波間に乗り出で、満月しほる梓弓花をあざむく舞姫が舳頭高く掲げたる浪に漂ふ扇の的弓矢八幡祈りつゝ撃つて放てばたがひなく紅扇千々に飛び散りて吹く潮風にひらくと夕日にうつる鮮かさ

興市が譽れの弓勢に兩軍船をたゞきたる屋島の浦に鳴く千鳥間はばや如何に答ふらん冬は眞白き花の山清きを己が心とし白浪蹴つて突き進む吾等が旅の面白や「安藝の宮島廻れば七里、七里七浦七えびす」節面白く歌ふ宮島節に振り向けば七百年のいと永き歴史を語る大鳥井もの云ひ顔に巖然と大海原に立つ様や遙かに見ゆる浮御殿實に其の昔太陽の沈むを扇でさし招き音戸が瀬戸を切り抜きし暴虐無道の清盛が人も人となさずして廣き天下を己が意の思ふがまゝに振舞ひて榮耀榮華を極めたる春夢いつしか消えうせて一度秋風吹きすさび年久しくも住みなれし花の都の故郷をやけ野の原とかへり見て末は煙の浪路をば行衛も知らずまよひ出で翠華搖々として西に問へば秋風至る所の野にみたりあゝ昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎今日は西海の浪に纜を解きて七千餘人行手の空はわからねども身にしむ秋はあざむかれず櫓に宿る月の影艦首にくだく波の音聞きつゝ進む瀬戸の海迎へる島や送くる島一島去つて又一島出ては隠れ隠れては又現はるゝ面白さ島や崎の其中を昔し偲びつこぎ行けば此處は長門

の壇の浦昨日は他人の身の土の上も今日は我身に降りかゝる哀れ果敢き世の慣諸行無常を  
感じつゝ平家一門残り無く恨を飲んで死につきし悲哀を極む物語水の色にも惚ばれて  
涙を催すばかりなり。あゝ美しの内海よ島あれば半島あり半島あれば島有り島かと思  
へば半島半島かと思へば島海路將に窮まるかと思へば忽ち開け開くかと思へば又忽ち  
窮る島の間へ飛ぶ千鳥小島の陰にはねる魚、猿の躍るが如き老松の緑手を長く延  
すあれば變化怪物の如き奇岩あり、を之を世界第一の公園と云はずして將何をかい  
ふべきぞ、行けば程なく下の關呼べば答ん門司の町馬關海峡打ち出て空飛ぶ飛行機に  
主さん乗せて行くよ玄海灘逆巻く浪の上狭い内海から大海原へ出たのでホット一息、  
「粉引婆さん御年はいくら妾しや挽木と同年」さあこれから粉引廻しに日本を廻つて  
見よう。こゝは名に負ふ鯨の吼ゆる玄海灘神宮皇后が三韓征伐や神風吹いて元軍十萬  
餘人残りなく海の藻屑と消え果てた元寇を思ひ、さては日本のナボレラン太閤秀吉が  
シベツヤ征伐の雄圖を抱いて渡つた當時日本海海戦の雄壯を懐ひては海國男兒の紅血

をそゝりつゝ博多に着き國の土産に博多帶博多人形も買ひ度いがぼつゝ懐中があや  
しいので筑前博多の帶をして博多美人に習ふて見たがどうやらこうやら生覺へ鯨節程  
味くはないが博多節で事を足し佐世保に向けて出港する。佐世保は第三軍港東洋第一  
とも云はれる吳軍港と肩の並ぶ位の處入港する海上に我が乗る舟の仲間が浮城の如く  
澤山碇泊して居て親しげに我等一同を迎へる。夜間などは「サーチライト」が西か  
ら東かちも放たれて其の壯觀は又一段の見物である。何十日もかゝる航海を紙上で  
五分間乃至十分間でやるのだから長居は無用江戸の仇を長崎にはいつてみればこゝは  
名に負ふ貿易港、商船などが非常に多い入港毎に上陸すること例によつて例の如し所  
變れば品變る地方の言葉は又格別「長崎の山の端に出る月の好からんげん月はあつと  
なかばい」太田蜀山人可笑な事を云ひ居つた。鼈甲細工の色々も目にはとまるが獨身  
の僕にはとんと要がない長崎出て有明の海に映つた月影を艦首に碎き行く程に幾百年  
の昔より其の譯何か知らぬ火の怪しき傳説に身の毛も彌立ち天草四郎時貞の原の古城

の昔を偲び南方へ進む。飛石の如き島之薩南諸島及び琉球である。種ヶ島あり戦國の頃初めて火繩鐵砲の傳はりしと云ふ所。今此の島が我が艦の大砲を見れば世の進歩に驚かざるを得ないであらふ。目には見へざるも彼のあたり鬼ヶ島ならんか。清盛が全盛の昔『薩摩海沖の小島に我ありと親には告げよ八重の潮風』と俊寛等の心情を思ふて涙に袖をしぼる。心より以南は明治の初年我が有になつた琉球今の沖繩縣、平治の亂に破れて伊豆の大島に流された爲朝此處に逃れて王となり子孫傳つて現代に至つた云ふ傳説も有る名物の泡盛酒の一盃もやりたい心は山々なれど臺灣行が急ぐので又次の日を樂しみによだれ許りが泡盛で遙かにかすむ琉球の幾多の飛鳥右に見て南方さして突き進む一瀉千里の勢で行けば程なく臺灣島此處は大分氣候も異ふ基隆淡水打狗安平と廻る支那形船や臺灣特有の竹の舟など見へる臺北などにも上陸する臺北と云つたら實に驚く總督府長官々舎の立派なこと内地では到底見ることの出来ない程である臺灣神社に詣りては當時の殿下及び將卒の艱難辛苦もそゞろに思ひ起される。昔から

日本一と鼻高くして居た富士山の鼻つばしをそぎのけて蒼空高くそゞり立つ新高山も話しの種に見て置ふと臺中より態々上陸する南部の郊外へ出ると土人が素破らしい大きい角を持つた水牛をつかつて居る所、或は四五月頃より關東婦人が隊をなして草をとつて居るこんな光景は一寸内地では見られない。まあ何と云つても内地では高くて田舎などでは嘗めることも出来ないバナ、パイナップルなどの果物も殆ど無代價同様に甘いのでしやぶり込む山奥の親爺にも送つてやらふと誰も彼もが小包を製する之では親爺などは食い方を知るまいとの年は若い老婆心で鉛筆を走らし詳細を書いて送る。

粉挽婆さん一寸居眠りをして白の廻りがちと變になつた之ではならぬと廻し始める臺灣より日本海沿岸へ一直線に黒煙を爨かせ白波を蹴たてゝ走る一寸朝鮮へよろう先づ「八道の山よいざさらば、年の七歳鉾とりて踏み荒したる日の本の武夫は今歸るなり」と朝鮮征伐の虎將軍で名高うなつた釜山へ入港、門司から連絡船が有つて内地と

の交通が頻繁で殆ど内地の町と同じことである。之から仁川京城へと行く日清戦争の火蓋をズドンと一發打つて放つた牙山は其の南方に在る。仁川江華島と我が海軍の戦史をバノラマの如く見送つて平壤に至る。此處に流れこむ大同江之ぞ土洲の快男兒川崎伊勢夫が我が陸軍を渡した川である。渡るにやすき安城の名は徒のものなるか敵の打ち出す彈丸に浪は怒りて水騒ぎ我が將卒を惱めたる安城渡も安々と打ち渡る日清日露の戦役に血を流したる遼東は雲か山かぼんやりと見へる軍人の典型乃木將軍の英靈は永久に滿洲の野を守るであらふと其の當時を偲ばれる。煙も見えず雲もなく風も起らず波たゝす鏡の如き黄海を航して第四軍港舞鶴に入港、吳や佐世保と異つたことはない。上陸して日本三景の一天の橋立を見に行く「二度と行くまい丹後の宮津、編の財布が空となる」「丹彼の宮津でピントハネテヨル」宮津えよつて酒の一盃も飲んで財布をふるつてみる之又一興。

町より少し行くと即ち天の橋立實に繪に有るのと同じことで老松が長く／＼連なつ

てをる兩側の波は静かな其松の間を通りぬけて山麓に出で八丁山を登ると笠松がある婦人などの旅籠に乗つて上つて行くのも見受けらる。笠松に着くと直ちに「宜見下開二兩股一倒上頭」と書いてあるのを見るウム「天の橋立股覗き」とは此の事かと直ぐやつて見る實に何と云つてよいかわからん。之は／＼とばかり天の橋立と云ふより外はないが天上の浮繪の様である天上の浮繪を見たことがあるかと云つたら見たことはないがまあこんなものだらふ。佐渡は金山此の世の地獄金は有つても此の世の地獄地獄はさに寄らずに行かふ。日本海を北へ／＼と行つて津輕海峡を抜けて陸奥灣へ入る、大湊や青森がある。赤く色附いた林檎本場だけに甘い、むしろ／＼とほうばる。海峡を隔て、函館がある此處は昔の五港の一其の附近の五稜廓は維新の頃榎本武揚などが據つて官軍に抗した所である大工場のある室蘭なども餘り遠くはない北海道樺太千島はもう入港せず廻らふ。千島の北方に行くとも山やうな氷山が流れて来るラッコオツトセイは氷山の上をムタ／＼と一目見て吹き出す様な腰つきをして這ふて居るのもあ



れば氷の下を潜つて居るものもある。又岡の方を見れば物珍らし相に人を見て呆氣に取られてボンヤリ立つて居る幾百の安房鳥を見ては全く北極探検にでも来て居る様な心地になる。此の奇觀こそ海兵ならでは何人も見る事の出来ない所でつく／＼海軍兵たる自分を喜んだ幕末の高田屋嘉兵衛が航海をした時のことを考へるに隔世の感がするのである。ラッコオットセイに別れを告げて針路變換牡鹿半島を巡つて仙臺灣に入り日本三景の松島に遊ぶ。造物主が畢生の腕を振り奇を極め妙を盡して思ふがまゝに造つた大小幾百の鳥それに生ひ育つ千態萬狀の松躍るが如く舞ふが如く走るが如く止まるが如く伏すが如く起つが如し、ア、松島や松島やと西行法師をして賞嘆措く能はざらしめしも誠に宜なる哉と云はざるを得ない。早速ボートを卸しをいとこそうだよ小島の影を節面白く歌ひつゝオールに瑠璃の玉散し、廻り廻つて漕ぎ行く時は宛ら浦島太郎になり代り龍宮の奥庭に遊ぶかと疑はれ其の愉快さは實に例へんに物なく如何に弘法の筆と雖も其の眞情を誤りなく書き盡す事は出来まい唯ア、「松島や／＼と云ふ

より外はない仙臺の町へ行つて仙臺平の本物を買いたいがちと早い／＼早すぎる花嫁を貰ふ時には態ざ／＼買ひに来ふと思つたが未だ其の機會が到來しないで獨身で暮して居る。それから大吠崎房總半島を廻つて第一軍港横須賀に入港、上陸すると日本第一の貿易港横濱、東洋第一の都會我首府の東京は僅か二時間位で行ける。此處に遊んで「隅田のほとりに住して」と俗謠にもある隅田の櫻、花の間に／＼ちら／＼と白き翼を打ち振りて飛ぶ名にし負ふ都鳥故郷遠く住む人の安否を問へば振り向きて物言ひ顔に飛んで行く可愛き姿見て居れば一片二片ひら／＼と帽子の上に散りかゝる花の心のいちらしさ鐘は上野か淺草か香ふ霞にいざなはれ上野の山に来て見れば萬目總て花の山吉野の山と疑がはれさては名に負ふ鳥飛山御國の爲めに倒れたる幾十萬の英魂が安けく眠る九段坂靖國神社に咲く櫻花雄魂爲めに慰まむ詣づる我等が胸の中散り来る花と諸共に落るは熱き涙なり。さては日比谷に又芝に春の眺めの美しや嚴そかな皇居を二重橋近くで拜し皇室の増々隆盛を極めむ事を祈る。高輪の泉岳寺に詣で、は

元祿十四年二月半浸々と降り積む雪に良雄以下四十七士が吉良の屋敷に打ち入つて花々しく戦ふ當時を思ひ血湧き肉躍る感に打たれ踵を返して有名な銀座通に三越白木屋を問ひ國への手土産を買ふ歸艦を急ぐので此處らあたりで東京見物は切り上げて鎌倉に向ふ大船で乗り換へ短かい間にトンネル九つも通り抜けてやつと鎌倉に着いた。こゝは七百年の昔頼朝が幕府を開いた所見る物聞くもの一としてその古を偲ばしめざるはない。飛ぶ鳥を落とすと云はれた平家の軍勢を石橋山に富士川に破つて源家を再興した英雄或は尼將軍政子等の墓苔むして人生の哀れを語る或は護良親王の逆臣の爲めに果敢なき御最後を遂げさせられし所畫尙ほ暗き土牢を見ては誰しも涙を催さぬ者はなからふ。鶴が岡八幡宮に詣でては別當公曉の隠れた大銀杏。吉理山峯の白雪踏み分けて入りにし人を慕ひつゝ静や静静が小田巻繰り返し昔を今に返さんと舞いたる人を懐ひやりさては一天萬乗の大君を遠國に移し奉つた尊氏の墓、墓上の石四離滅裂逆臣の末路を語る或は扇が谷、山の内の管領の邸の跡など身は何百年の歴史の中に彷徨する

感がする。おつと見落すまいぞ長谷の觀音様まだ有名な露座の大佛さん色男どの噂とりどり。逗子の濱へ行つては御承知の不如歸で武夫浪ちやんの愛情に血が湧く七里が濱の磯づたい稻村が崎名將の劍投せし古戰場舊跡を探つて居れば果がない時間に遅れぬ様にぼつくと歸艦しよう。横須賀を出て伊豆半島を廻り田子の浦打ち出で見れば白妙の富嶽の雄姿鮮かさ五色の袖のうるはしき天女の舞を夢みつゝ三保の松原過ぎ行けばこゝは名に負ふ遠洲灘荒き浪風何のその岩をも通す桑の弓壘の上を通り抜け鉤を投げる熱田灣、七本鎗の清正が築いた名古屋城金の鯨鉾を遙かに見熱田神社に詣でては八劍伏し拜み伊勢海を航して宇治山田に着く。上陸して内宮外宮に詣づ。實に何千年來の老樹枝を交へ水清き五十鈴川靜かに流れて深々と邪念は去つて身は神の膝下にある感じがする。何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝと西行法師に歌はしたのも誠に道理である。踵をまはし二見が浦に遊び其の風景を愛でさざぬの壺焼を食ひいもりの黒焼はないかとひやかす。潮の岬を打ちまはり由良の海峽ゆ

ら／＼と行けば程なく神戸港林の如き橋や幾多の商船續々と舫々摩して碇泊す關西一の貿易港嗚呼忠臣楠子の墓湊川神社を參拜し夏尚ほ寒き布引きの瀧の響きを後にして阪神電車にゆさぶられ日本一なる工業地大阪の地に來て見れば黒煙天に擴がりて天日暗きばかりなり 大阪城や樂天地道頓堀もそこ／＼に浪花の町を立ち出て行けば左に淡路島通ふ千鳥を眺めつゝ須磨や明石もいつとやら舞子の濱もはや過ぎて吳軍港に着きになり。

此れは一回の航海であるので二回三回と廻るうちには日本の名所舊跡は殆ど残りなく行き盡すことが出来る、或時は琴平神社に詣で海路の平安を祈り又は出雲の大社を拜みては良縁を頼み此處には九谷焼相馬焼彼處には寄木細工に埋木細工さては七寶若狭塗り種々とりどりの名産を買ひ集め國の土産に爺の顔の皺を延ばすも亦一興。

(ホ) 世界漫遊

扱て日本近海航海も濟み日本の名所舊跡は殆ど残りなく見盡したので次ば世界漫遊

と出かけやう。渺々たる大海原を唯一またぎと飛び渡り或時はコロンブスの漂着した様な無人の島へ辿りつき又或時は人食人種の鋭目で睨んで居る島、毒蛇猛獸の住む物騒極まる島に上り花の都と歌はるゝ華美の極を盡した歐洲諸大都市を訪ひ或は名も知らぬ花木に飾られた風光の極美を眺め赤道直下に耶子の葉蓉樹の幹さては木の葉に陰顯する蠻人の家等の恍々たる月光に照らされ、橋頭高く星を宿し、艦首に碎く月影を賞で白浪蹴たてゝ突き進む時宛然泰西の名畫の中を航海する心地して實に何の語何の句を以て表はして良いかわからない。

然し之は經費其の他の關係上十人が十人悉く行く譯けにはゆかない。平素から品行方正職務勉勵者で世界の何處へ出しても天晴日本の軍人として些の非難のない者を抜擢して乗組員とするので従つて世界漫遊を奉給附でしやふと思つたなら宜敷く海軍に入り尙ほ平素から心掛けて勸勉努力せねばならぬ。

愈々遠洋航海世界漫遊と出かける。先づ出發前に於て普通第一軍港なる横須賀に集

合し此處に司令官は陛下に拜謁を仰せつけられ兵員は炭水糧食の搭載に忙殺を極める。之を終ると各々相當の休暇を許される。其の休暇には前に述べた如く上陸して所々を見物するのである。茲に休暇も終り愈々海兵の最大希望と各自の抱く様々の空想を乗せて今や横須賀軍港を解纜せんとするのである。

機關の響き艦底に起り艦は動搖を初めた、汽笛は鳴る、在港の各艦は乗員一同禮服に帶動、登艦禮式を以て誠意のこもつた見送りをし又一方に於ては「安全なる航海を祈る」との信號檣頭高く靡く。吾れよりは「御厚意を謝す」との信號を以て應ふ、出港用意の喇叭勇ましく艦は解纜した。傍らに於ては「守るも攻むるも鐵の浮べる其城日本の本の皇國の四方を守るべし」の軍樂隊は奏せらる、其間萬歳々々の聲は天地に轟き横須賀灣は崩るかど許り。艦は歡呼の聲に送られて油の海を迂り行く太陽は輝き海水はセビヤを流した如くである舷に立つ友人の眉が目が口が一秒一秒とうすれて行く體が次第々々に小つて行く、おうもう顔が手が足がぼんやりして來た、あれが誰であ

るか、もう見わけもつきかねる、今は打ち振る「ハンカチ」も帽子もちら／＼と飛ぶ蝶の翅位ひにしか見へない萬歳の聲も、もう幽かにしか聞へない。軍樂隊の自分等を送つて來た艦も亦引き返した。お、艦の友はもう蟻の様に小さくなつた、町も艦も今は隣寸の箱の様にしか見へない。遂に家も艦も隠れてしまつて今は高い山々が薄藍色にポット見へるばかり艦は東へ東へと進んで行く夕陽は故國の山に春かうとして山上數尺の所にかゝつて居た。耀々と輝く赫光は次第に弱つて黄金色を呈し團々たる靈體は下るに従つて太さを増して行くのであつた。刻一刻と山は水平線下に沈んで行く夕陽は山の頂に近づいて行く、夕陽の下端今にも山頂にふれんとすれば黄金色は漸々赤味を帯びて朱金色となり、天に映り海に映り宛ながら熱火の燃え出でた様である。何時しか西空一帶低く其處彼處に現はれた雲翳は裏面より此の麗光をうけ、熔鑛の半ば凝固したるが如き濃淡班々とした黑影の間に微かに朱金色の焰を燃し其の周圍は紫に縁取られ更に其外周に朱金の縁を畫き雲の絶間よりは朱金の光芒長く天空に射出し

人をして靈雲の變くかと疑はしめるのである。將に消えんとして未だ消えざる母國の山は紫の雲の如く紫の霞の如く吾等の視線の的となつて横つて居る又我が艦と落陽との間は爛々たる朱金の浪を萬頃の海に湧かし炫々眼に反映して凝視しがたく莊嚴靈妙壯美の觀を極めるのである。日は次第に母國の山に隠るゝに従つて形は益々大に色は益々赤く水益々燃え頭を回らして我が艦上を見れば濃き鼠色の煙突も櫓も艦橋も砲塔も人も吾れも西に向へる一面は皆赫々として燃ゆるが如くである。

日は天海の間紅蓮の焔を燃やし遂に靈容は西山の彼方に消え去つた。されども餘光尙ほ西天を燃やし紅蓮の焔半天を焦し其の壯觀例へんにもなし。

此時ふと氣づき今一目と御國の山を振り向けば眞紅の焔の中に雲か山か吳か越か彷彿として紫煙の如く幽かに之を認むることが出来た。刻一刻とうすれ行く此の故國の山を見る時に今愈々日本を去るかと思へば淋しさ悲しさ苦しさは一時に胸いつばいにせきあげて只茫然として吾を忘れ恍惚として案山子の如く宛ら甲板に釘附にでもなつ

た様に身動きすらもすることが出来ず言葉一つ出し得ずに立ちすくむのであつた。

夕陽既に落ち四顧漸く仄暗く早くも宵の明星は獨り微光を放つて西の空に生れ出た暫くして星は星を生み一星又一星五星となり十星となり天空愈々暗くして星は愈々多く光は愈々鮮明を加へて來た。時に白光朧に東天に起り宛ら夜の明け初めんとする様である。白光朧りに加はりて東天愈々明くやがて銀の笠形なせる十六夜月は悠々其の玉體を波上に現はし光々たる月光を八方に放ち暗波忽ち變じて銀波となり黒滴變つて銀滴となり笠形の月輪軀て變じて半圓となり遂に變つて大圓となつ銀波に交ふるに金波を以てし銀滴更らに變じて金滴となり忽ちにして一大銀圓に龍神下より之を捧げて天女上より之をあげて全たく水天の境を離れ朦朧たる天空に清光忽ち漲りて星辰ために光を失ひ煌々たる月光は波上金蛇、銀蛇を走らし滿目濶然宛として天國に遊ぶの感がある。

吾人は此の急速なる銀界の變轉に接して僅々半時間の前夕陽の壯觀に驚嘆の聲を放

ちたるを願れば彼の落日が早くも水平線の下を西より東に廻りそが紅蓮の金衣を白妙の銀服に更へて再び此處に靈容を現したるにあらざるかと疑はれ暫し此の自然の壯觀に茫然たらざるを得ない。

斯くて月に清空を破つて一尺を上れば艦は銀波を蹴つて一里を進み水天杳渺の間月艦互に活動を競ふが如く形影の伴ふが如く浩々たる空中の孤月輪と漫々たる波上の一浮城とが絶妙の對照を爲して益々壯大の感に打たれた。月は水平線を一問離れ二問去り遂に中空に其の雄姿を留めた。此の時波濤稍や高まりて艦隊軽く動搖し艦の中央線に立つて月に對すれば橋頭は月の右に見えつ左に見えつ交々更る様の面白さに暫く恍惚として眺めるうち何時しか我が艦の動搖するを忘れ橋頭の左右に動くを見ずして唯月の橋右に走り橋左に駆けるを見玉兔鞦韆に乗りて戯るかと思はれ天津乙女が天のテニスコートに月球を弄するかと疑はれた。月既に傾きて斷雲頻りに去來し雲は月を止めんとして抱き月は雲より脱せんとして奔り忽ちに満月皓々忽ちに天海朦々或は半

海輝き半海暗く匆忙變轉の狀亦月夜の壯觀なる哉。

此の偉大にして壯快極まりなき風光に恍として我れを忘れ夜の更くるを知らざりしがふと吾れにかへり匆匆釣床に入り航海の第一夜を明し起床喇叭に曉夢を破られさて如何なる地點にやと甲板に出づれば月は既に落ちて消へ残りたる星辰或は黄に或は赤く或は青く又白く燦々として満天に輝くを見光は次第に薄く次第に淡く夜の帳は東天より捲き上げられんとし灰かに白み白は次第に黄を交へ黄色更に淡紅を帯び紅次第に濃度を増し水平線上に横はる瑞雲一條の白より黄に黄より淡紅に淡紅次第に變じて濃紅に代り宛らルビーの玉を集めたるが如く眞紅の光嚴かに輝き海は之を映して黃蛇紅蛇を走らし一波又一波紅浪は紅波を生み次第に擴がりて我が艦を襲ひ千波萬波宛がら臙脂を溶かしたるが如く人も橋も煙突も砲身も皆悉く紅に塗りかへられ艦上見渡す限り萬株の杜鵑花紅に燃え出でたるが如く人は宛ら杜鵑花畑の中に立ちうらゝかなる春光を浴び陶然として酔へるが如くである。

須臾にして金色の大輪其の一端を水平線上僅かに表はすかと思れば赫々たる光線忽ち東天に走り真紅の萬波忽然として金色に變じ分秒を競ひて金色は更に増し金色を加へ命波愈々廣がり我が艦を呑み刻々として日輪は其の雄姿を現はし懸て半圓となり遂に數分を出ずして完全なる大輪となり今や灼耀たる光線を四方に放ち燃々として輝き天も海も艦も人も皆躍如として眠りより醒めたるが如く清新の活氣は潑々宇宙に充ちて其の壯麗なる實に例へんにもなし。神秘にして勇大に崇嚴にして力強く意氣昇天の勢ありて而も悠々自重せる他に一步をも譲らざる剛ありて而も尙ほ謙遜なる嗚呼之をしも男子の典型と云ふべきか。

時移りて太陽中空にかゝる時海水は恰も鏡を動すが如く輝きまばゆき許りである。白雲は軽く片々と飛びゆく最早目に入るものは天、水、太陽、雲と折々飛ぶ飛び魚や鳳程萬里何處に行くか大なる水鳥の飛ぶを見るのみ。同じ日を繰り返し東南布哇に向つて進むのであつた。途中前述の如き太陽の壯、月の美かくして幾度か我等の心目を

喜ばしめ或は雨降り或は濃霧たちこめて寸尺をも辨じ難きことあり。或は波起つてさしもの大艦も動揺することあり。十日餘りも起ち風起り艦の動揺甚しく吾等は甲依に勤務中なりしがふと遙か向ふの方、天上雲に入れる白柱ありて吾等に向ひ徐々として移動してくる様子あり余は濃藍色の海面と暗々として黒汁を流せる黒雲との間にかゝれる白皚々たる大瀑布の如き奇怪極まれる現象を見餘りの珍らしさに只恍惚として瞬も一つせず此の稀有の光景に見とれて居た艦の近づくと共に奇怪は愈々奇怪を増し地獄の底より聞ゆるかと思はるゝ奇妙な音響我が艦に迫り其の光景の壯大なる實に壯と云はんよりは物凄いと云ふべきか黒煙より白布の垂れるが如く見へしもの之れ違ふ方なく彼の所謂龍巻にて大旋風の起りて天上に向ひ海水を巻き上ぐるものであつた、嗚呼何等の奇觀何等の壯觀か之に加へん余の生れて以來見しあらゆる現象中之ぞ誠に奇觀の最大なるものであつた。かゝる珍奇を極めし稀有の現象こそ余が海兵として受けし最大の賜であつた。

久しく見なかつた水鳥の飛んで居るのを見た。之は陸地か或は鳥が程近く有るを證據だてるのである。航すること數日にして水天彷彿の彼方遙かに煙の如く雲の如く將山の如く幽かに淡き物影とをぼしきものが、目に入つた永い／＼間目に見る物は唯渺茫たる蒼海と我が乗る艦の外殆ど何物をも認むることを得ざりし吾等にとりしては雲を見ては陸地かと疑ひ煙を見ては鳥かと思ひ陸を慕ふの念宛ら乳兒の乳房を慕ふが如き有様である。されば吾人の今眼前遙かに認めし物若しや陸地ならずやと疑ふ念切にして飛ぶが如くに速き我が艦の速力も今ははや遅しと思はれ一刻も早く其の正體を確めむとすれども艦は容易に近付かず飛び行かんとすれども翼なく飛行機なきを如何せん詮方なく待つこと暫らくにして煙の如く見へし物影次第々々に濃くなり遂に其の何物なるかを認むることが出來た之は雲に非らず煙に非らず吾等の永き間戀ひ焦れたる島布哇で有つた。

あまりの嬉しさに手の舞足の踏む所を知らず翻つて友を見れば見えた、／＼の大騒ぎ

さなきだに遅く感じられた艦は尙ほ更遅くなつた様な思ひがして友と互に上陸を樂しみ今か今かと待つうち鳥は次第に大となりやがて樹木現はれ家屋現はれ一分を経る毎に其の鮮明さは加はり斯くして遂に錨はホル、港に投せられた。

永い／＼間長さ二町幅二十間足らずの小さい世界に閉ぢこめられ見る物としては水より外に無かつた僕等は今縁滴たる草木を見、小なりとは云へ吾等の世界の何萬倍も有る世界に移されたので恰も籠の鳥の青空高く放たれた様な感に打たれ今は體も心も大きくなつた様な心地がして、ほつと一息つくが早いかな新しい土地に對する憧憬の笑を満面にたゝえ息せき切つて町の彼方へ飛ぶが如く躍るが如く吾れを先きにと眞一文字に駆けつけた。

漸く町に来て見れば驚く勿れ見る家悉く豆腐の如く見る人總て異様の衣を着け聞く言葉總て雀のさへづるが如くいくら耳を澄しても悲しい哉一語だに解し得るものになかつた。僕等は宛も田舎者が東京見物に來た様に目を丸くして頸も目の玉も疲れき



る程うろ／＼して歩ま廻つた。取りわけ僕等の最も嬉しかつた事は歩く間可なり多くの日本人に會つた事である。他縣に居て同縣人に會つてすら何となく懐かしさの湧くもので有るが外國に居て母國の人に出會つた時の感じは又特別で迎ても／＼前者の比ではない宛ら數十年前以前に別れ行方不明であつた兄弟にふと廻り會つた感じがして餘りの嬉しさに言葉も出さず唯近寄つて手と手を堅く握りあひ目と目と互に見交し思はず瞳を濕すので有る。御國を守る母國の軍人の勇ましく町を歩く様を見て彼等も少なからず力強く思つた様な風であつたが僕等も思つたより多くの邦人を異郷の空で見たので實に肩身の廣い感じがした。餘りの面白さに有頂天になつて、次から次へと變る町の珍しさに引かれてあてども無しに、うつら／＼と歩いて居てふと氣がつくと僕は何時の間にもやら立派な日本の町の真中に立つて居た、まはりの家も住む人も皆悉く日本のもので僕は思はず知らず其處に立ちすくんだ。そして次の様に考へた

今處所に日本の町の在る筈がない、それかと云つて僕は今慥かに日本の町に立つて

居る、おう扱ては今迄で永い／＼間の航海も今の今迄で見た豆腐の家も皆んな一場の夢であつたのか、いや／＼僕は確かに軍樂隊に送られて横須賀を十日位以前に出港した、又慥かに今迄で軍艦に乗つて居た、では今僕は國に歸つた夢を見て居るのかしら手をつめつたが矢張痛い、こいつは可怪しい扱ては布哇の狐に一盃喰はされたのか、之は残念口をしや苟も日本帝國の軍人が狐に偽されたとあつては日本男兒の顔 立た、いや／＼人もあらふに、我が輩様が狐風情の手にかゝつてたまるものか、僕は一腕くんで頭を六十度近く傾けて一生懸命考へこんだ盛んに考へ込んで居る真最中何處の空から降つて來たか大きな石の様なもの僕に肩に落ちかゝつた。吃驚仰天折角傾けた頭も一時に直り盃の様な目をして振り向くと、

「オイ君こんな所で一體何してるんだ」

見れば親友K君が不審相な顔をして立て居た石と思つたは武骨一遍のK君が蝶螺の様に骨ばつた右手であつた。

「オーK君かよい所へ来て呉れた此處は一體何處の何と云ふ所かい」

「君此處を知らんのか、此處は有名な布哇の日本町ぢやないか」

「あゝそうか。」

エライ劍幕の我輩様は何處へやら、餘り永居をして居ると本物の狐にだまされるかも知れない、もうぼつ／＼と出港しやう。錨を巻く音勇しく白浪吐いて東に進み着いた所は北米太平洋沿岸の第一の良港サンフランシスコである。此處は人口六十萬七千餘有つて北米第十二位今は米國太平洋貿易の中心地となつて日々其の繁榮を増して居る。親友岡崎と上陸し電車だのケーブルカーだの種々難かしい名前の車に乗かへ／＼桑港市中を縦横無盡に見物する。如何なる急坂も平地を行くが如きケーブルカーにはほと／＼感じ入るの外ない。急坂の上り下りに左右の町を見て居ると家が皆歪んで倒れそうに見へるのが可怪しい。商賣町住居町とはガラリと體裁が違つて居る。商賣町は十階二十階とやたらに大きな四角な同じ様な形の造りで一寸の餘地もなく葺と立

ち並んで居る、何處も立ちよつて見れば家づくりが大體に於て同じ様で厭き易いけれども小高い處から市中を見をろせば兼ねて繪葉書で羨んだ通りの美しい景色となる、其れといふものは、日本では滅多に彩色をせぬけれども此方では屋根でも壁でも多く彩色がしてある而も隈を取つたりして色々の強い色を華やかに取り合せてあるから、遠方から見れば玩具店の様に華々しく見るのである。理由はともあれ美しいに違ひない。布哇の町で僕が頻りに感心すると岡崎がまだ早い早過ぎると止めたが成程此處とホノル、と比ぶれば銀座と品川程の違がある、此處ならばもうそろ／＼好いと思つたかしら岡崎も時々感嘆の聲を漏した。

此處にも相變らず我々の同胞は住んで居る今では其の數七千五百に達して居る上町下町と二つの日本人町を造つて居る。桑港では勿論上等の町ではないが、夫れでも東京に持つて來たら大威張であらふ、宿屋、料理屋、桂庵、洋服屋さま／＼の日本字の招板を見るのは嬉しいものである。又此處で一番目抜の場所はマーケット街と云

ふ通りで、兩側の歩道の間、八條もの軌道が造られてある、殊に目新しいのは此のマーケット街の續きからトウインピーク（双兒峯）と云ふ山を貫いて一萬二千尺のトンネルが造られてあつて、其中を夜中電車が通つて居ることであつた。

これから南に向つて艦首を向け暫く經つてロサンゼルスに着いた、此處は米國の西半に於ける最大の都市であつて人口六十五萬餘を有し全米國で第九位を占めて居る。氣候の良好なることは世界一で花卉草木四季折々の眺めをそへて山も河も野も庭も常に春の様に美しいので北米本洲から富豪の此處に邸宅、別荘を造るもの日を追ふて多く、殊に活動寫眞と飛行機の無比の好適地なので飛行家活動俳優の入り込むこと夥しく爲めに新思想は日に日に輸入され時々刻々と新しくなつて居る目拔の場所としてはブロードウエースブリング町等である。尙ほ此の町は近頃附近の町を合せて今ではニューヨーク以上の面積を持つて居て尙將來非常に發展する見込の有る町である。此處にも日本人町が造られ其の人口一萬五千に達して、北米の日本人町中最大のものである。

ある。従つて領事館ロサンゼルス日本人會を筆始めに横濱正金銀行支店等多くの我が銀行會社等がある、又日本人經營のホテルとしてニューヨークホテル、ミカドホテル、帝國ホテル等がある。此の外今は寄港しないが北方英領カナダと北米合衆國との國境近くに人口三十五萬以上のシャートルがある。序だから日本人の聞いて心持の良い様なことを云つて置かふ、夫れは此處にある二百餘りのホテル中其の三分の二以上は日本人が經營して居り又同市の營業税の最高額を納めて居る者は日本郵船株式會社である。

ロサンゼルスを出港して尙も南へ／＼と航海を續けた航すること須くにして吾等は、メキシコの西海岸の沖合にかゝつた。此の國は日本に對して誠に好意を持つた國で容貌等も非常に似て居り又「ウメ」とか「タケ」とか云ふ名もあるとの事、こんな事から此の國は大昔日本人が移住して此處に住居を求め其の子孫が次第々々に繁榮し今のメキシコを建てたものであると云ふ説もある、それで日本人が行くと非常に喜ぶ相である。

から一寸寄り度いが今回は仕方がない。南へ行くにつれて暑さは次第々々に増して来る。サンフランシスコあたりでは日本の氣候と餘り變らなかつたものが今は一度増し二度高まりてメキシコを南へ過ぎバナマ運河の邊へ來ると日本の内地ではドテラに着ふくれて炬燵に這りこんでまだブルブル振へて居る様な、身を切る様な寒い時でも此處に來ては單衣一枚でまだ汗が出る。此處からバナマ運河を抜けて大西洋に向へば一日かゝらぬ内に大西洋に出る事が出来るが今は南米視察の必要上態々アルゼンチンの南端ホルン岬に向つて進んで行く。艦は今コロンゼヤ國の西にかゝつた、一時間毎に赤道に近づいて行くので暑さは更に愈々嚴くなるばかりで鋼鐵で鍛ひ上げた軍艦も大砲も檣も甲板も今はもう溶けて了ふかと思はれた。然し海の上のことなれば絶へず涼しい潮風がそよ／＼と吹いて來るので僕等はさ程苦しいとも思はなかつた。黒煙を海の彼方に飄かせ尙ほも南へ南へと航海を續けた、その中今迄で吹いて居た風がどうしたものかピツタリ止むで艦尾に立てた軍艦旗もたゞふわり／＼と力なげにゆれて居た

すると今迄で涼い風のためにやはらげられて居た暑さが一度にまして、もう今は手も足も顔も焼けてしまふかと思ふ程で砲身や甲板に觸つてみると火の様に熱かつた。將校に聞いてみると此處が所謂赤道無風帯と云ふ所で艦は今將に赤道直下を走つて居るとのことであつた。もう其の暑いこと、云つたら體を何處へ仕末したら良からふかと思ひ海の水もブツ／＼煮へかへり相、オ、鯨が鯛が鱈が鯨が湯だつて煮えて艦のへりゑ浮いて來た。それは眞赤な嘘だが煮えて浮いて來相に思はれた。さあ之から僕等は南半球へ行くのだ。日本等では南へ行けば行く程暑くなるが之からは南へ行けば行く程寒くなるのである。

コロンピヤの沖はいつしかエクアドルの沖も、もう程なく過ぎ去らふとして居る、今は暑さも少しは弱くなり涼しい潮風さへも再び吹き始めた。大變涼しくなつて吹く風が殊の外氣持よくなつたと思ふ頃艦は鳥糞で有名なペルーの沖を走つて居た、北から南へ走つて二千八百四十里世界一の長山脈アンゼス山脈の頂上高く輝やく白雪の

中を流れる濃藍色の氷河の雄大な凄まじいまでの美しさにうつとりと見とれて居る中僕等は早硝石を以て有名なチリ沖に来て居た。南北兩米中最高山アコンカグアは其の白皚々たる高峯を二萬三千九百十尺の蒼空に聳やかしてお前等の鼻にかける富士山も俺の足許へも寄りつけまいかと云はぬ許りの顔つきで僕等を見下して居た、と小牛や羊を一つかみにすると云ふ大猛鳥コンドルは二十尺に餘る其の大翼をのばして高空高く舞つて居た、うつかりして居るまに涼しさは何時のまにやら肌寒い氣候となつてゐた。アンデスの山々は更に増々高く海岸は宛ら切りたてた様な絶壁となり島は點々として眼前に散らばり誠に何ともたとへ様のない美しい所に來て居た。寒さは次第に厳しくなり、もう冬服ですら凌ぎ難くなつて來た。それも其の筈此處は丁度日本の北端樺太の國境と正反對南緯五十度の所である、風はヒュー／＼と橋をかすめ艦内の水は凍り手は不自由となる。寒さを冒して尙も／＼南進する。數日前迄では觸つても焼けつく様に熱かつたデツキも砲身も今は反對に觸れば凍りつく様につめた。此の邊に諸君

の御慣染のロビンソンクルーソー流れついて永い／＼間たつた一人で暮して居たといふ有名なファンフェルナンデス島が在つた相だが今は地震の爲めに海に沈んで見えなくなつて居る。シャツを何枚も着込んで横に一轉び轉んだら二三間も行け相な風をして目ばかりバチ／＼として居る内に艦は舵を廻して彼の有名なマゼラン海峡にさしかゝつた。此の海峡はポルトガル人マゼランが昔印度航路を發見しやうと思つてポルトガルを出で此んな所に迷ひ込んだ相で其の名を取つてマゼラン海峡と云つて居る西の半分は誠に狭く兩岸が高く見上げる様な絶壁になつて居たり又或所は鬱蒼と生ひ繁つた樹木に被はれて居るので誠に目も醒める様な絶景であるが波風が強いので航海は非常に危険な所である。此の海峡も無事に通過した。出れば茫々たる大西洋アルゼンチンの沖を直航して其の首府ブエノスアイレスに向ふ五百里餘りを一飛びにブエノスアイレスに上陸した。此處は人口百二十萬餘を有し南米南半球に於ての最大の都市で東京と殆ど正反對位の位置に有るので氣候の良いこと此の上なく花は一面に咲きみだ

れ胡蝶の如く之に舞ふ蜂雀の羽、或は紫、或は緑に時に紅に又黄金色輝やく様  
宛ら萬紫千紅の風に散るが如く一度郊外に出れば廣袤幾千里に渡る草原あり、綠草滿  
野を蔽ひ宛然青海原の如く其の中に鬱として繁れる森林島嶼の如く凹所には碧瑠璃の  
清水をたへへ河流の沿岸には椰子ビンロー樹等名も知れない大木枝を連ね蔓草其の枝  
にまとひて美花咲きみだれオーム、キンコ等の其の葉影に鳴くあり。眼を轉じて沈み  
行く太陽が見れば一望千里地平線の彼方迄で夕陽に紫紺の光まばゆき迄でに輝くは、  
幾億萬と立ち並べる薊である。會々バンバス風の吹き来れば薊は揺れて紫紅萬頃の煙  
波を起し遠き彼方夕陽を横り煙波を蹴つて疾驅するものあれば之駝鳥の大群である。  
嗚呼何たる雄壯の觀であらふ此の草原こそはアルゼンチン中部に横はり驚く勿れ二十  
五萬方里の面積を有する草原バンバスである。夜は螢火幾萬暗林に飛び亂れ不夜林を  
造り彼方此方に折々響く猛獸の聲奇觀極まりなき此の地に來り唯一人として怪と云ひ  
壯と云はぬ者があらふか。惜しき眺を見殘して更に北航する、南米の最小國ウルグア

イを後にして南米最大國世界第七番目の大國ブラジルの首府リオデジャネロに着く。  
本港は其の風光の絶佳なる伊太利のナポリ濠洲のシドニーと共に世界三景の稱である  
港内大小八十八個の島、悉く花崗岩よるなり、島形奇を盡し妙を極め或は駱駝の背の  
如く或は人の頭の如く或は帆船の風を孕んで疾走するが如く、椰子檳榔樹珊瑚等青々  
と生ひ繁り葉影には橙色に熟した果實見え隠れ紺青の水に映る様宛ら松島を此の地  
に移したかの如く其の麗しさ實に例へんに物なく若し西行を此の地に遊ばすなら、あ  
ーリヲデジャネロや——と再びくりかへすことであらふ。當市は人口百萬を有し南  
米第二の大都會であつて日本人も近時大分増し氣候は臺灣の南部位のものである。見  
あかぬ景色に別れを告げて北航すれば暑さは次第々々に増して來るサンサルバドル、  
ベルナンブコは通り抜けサンロケ岬を迂廻し艦首を東北に向けて行く程なく赤道直下  
のアマゾン河口に達した。アマゾン河は其の源をペルーノアンデス山側ローリカ湖に  
發し洋々千二百二十四里を流れ途中四十七萬二千方里の灌域中に廣漠として際涯なき

アマゾン大森林セルバスを造つて居る。本森林こそ誠に世界最大の森林で其の南北は八百哩に達し東西の徑は實に千二百哩に達してをる。林中一本のレール無く道無く只アマゾン河の悠々たる流れあり。獨りビユーマ(亞米利加獅子)ジャグアール(亞米利加虎)或は大蛇ボアの猛獸毒蛇の林中を横行濶歩するのみ。尙ほアマゾン河の偉大なこと本流に於て九百里支派を合せて六千里の間汽船の航行に適し河口を逆る四百五十哩の處に於て尙ほ潮汐の影響を受け河口近くの河幅五十哩に達し之を溯る五百哩の地點に於て十哩、二千五百哩の所に於いて河幅尙ほ一哩有りとは誰しも内地に住居する者にして驚かないものはなからふ。

此處を出てブラジル珈琲に舌鼓を打たせ餘りの甘さに赤道直下の炎熱も打ち忘れグイヤナ、ベネズエラも何時の間にもやら打過ぎて北米合衆國の首府ワシントンに向ふ途中西印度諸島が有る西歴千四百九十二年一代の偉人コロンブスがカスチラの女王イサベラの援助を受けて木葉の様な船一杯に命を托し萬難排して漸く印度に着いたと思ひ

はつと一安心した所が諸島中のジャマイカ島、とんで所に印度が有つたものだ、コロンブス先生嬉しかつたが少なからず癢にさはつたらしかつた。そこで腹療せに意地づくで印度にして了つたところで印度が二つ有つては子や孫が嘸迷惑するだらうとの老婆心から仕方なしに西と云ふ字を一つふやし一つの島かと思つたら他にも澤山有つたので諸島ををまけにつけて置いたとさ。それから兩米の彼の茫大な大陸が発見されて潮の押し寄せる様に歐洲から移住民が來で今の米國が出來メキシコが出來ブラジル、アルゼンチンと多くの國々が出來たのである。

此の様なことを思つて居る間に艦は首府ワシントンに着いた、人口三十五萬三千三百七十八有つて左程大きい都會では無いが首府である丈に理想的に造られて居て町は整然碁盤の目の如く市内は清潔閑雅を極め百年の永き日子を要して出來た百五十尺の高さを有するワシントン塔。リンカーンの狙撃されたフォード劇場、廣大なることに於て世界一の國有圖書館、千七百九十二年ワシントンに依つて基石を造られ第二大

統領アダムス以來大統領の住居で有るホワイトハウス、扱ては全市を挾んで流れるボトマツク河アナコスナ河の沿岸の美麗なる風景等見るものが頗る多い。

此處を出で愈々ニューヨークに着いた。此處は大戦以來長足の發展をなし人口七百萬を有して世界最大の都市で有つたロンドンを凌駕し今や世界最大の都市となり昇天旭日の勢で發展して居る、其の所謂東京の銀座通に相當する町はウォール街で一エークル(千二百坪)に一千人以上の人が住んで居て此の町を中心として四方七八町の所には二十階以上の高樓が軒を連ねて立ち並んで其の狀が天を摩する様で有るので名附て之を摩天閣(凌雲閣)と云ふ。

其の代表的の物ウォールズビルディングは高さ七百五十尺階數實に五十八階に達し現今世界最高の家屋となつて居て三十階迄では二十八間四面も有る宏壯なものである。工費に百六十萬圓を要し基礎だけでも二百萬圓を要したと云ふ。尙ほ地下二百七十二尺迄で掘り漸く岩石に達し始めて根盤を堅めたとは誠に驚くの外は無い。

尙ほ世界第一等の大きな家屋をも紹介しよう夫れはシチーインヴエスチングビルディングと云つて高さは四百八十六尺階數は三十四階で前者の比ではないが其の大なること事務所に供する大小の室無慮五千八十と云へば一寸驚かぬ譯けには行かない。尙ほ三十四階を延坪にすれば實に一萬七千六百十二坪ときては之當に二度吃驚まだ一此處に来て日々事務を取る者が一萬六千七十二人で三度吃驚、御負けに家賃が一室一ヶ月五十圓宛一年の總家賃三百一萬一千四百圓之で慥かに四度吃驚之を見て聞いた時は流石の日本水兵様も大久保彦左ではないがいくらヂダング踏んで力むでも開いた口を閉ぐ譯けには一寸行き兼ねた。

尙ほ此處に一つの大きい橋を御紹介しようロングアイランドとニューヨークとを連絡する鐵の釣橋で長さ六千五百三十尺幅八十五尺、兩端に立つ柱の満潮の水面上よりの高さ三百八十七尺、之に用つて針金餘り大きいので針金などと云つたら讀者諸君に笑はれるかも知れぬが驚く勿れ一本の直徑一尺三寸長さ三千五百七十八尺就中特に長い



物四條之を一筋に合すれば實に三千五百十五哩となり一條の重さ無慮一萬二千噸西歷千八百七年起工千八百八十三年開通其の費用三千四百萬圓。

次に奈良の大佛の兄弟分を御紹介しよう。夫れは紐育港口高く立てる巨像自由の像である、銅及鐵にて造られ高さ四十七米突の花崗石の臺に立ち像の高さ右手に捧げた炬火の頂天迄で四十六米突(百五十一尺八寸)食指の長さ二米突(六尺六寸)總重量驚く勿れ十三萬二千九百七十五貫、五丈三尺五寸の奈良の大佛さん顔色無し。兄弟分とは見當ちがい、きつと親分にもがひない。頂上に光冠を戴き左手に備忘録を持つは過去と未來を示すの意右手に捧げた炬火は世界を照す意であると因に此の大像は各部調和整齊して美術の神髓を發揮して居るとのこと。

今一つ耳新らしいことは地價の御話にならぬ程高くフデウオールズ町では一脚の椅子を据へるに二千四百圓の地價を拂はねばならぬ所が有り一坪四萬二千六百五十四圓一尺平方の地價千九百九十圓とは地の底から白金で出來て居りはしないかと怪しむ之は

皆マンハッタン區の中にあるが元々此の區域は今を去る二百八十餘年の昔印度の商人が土人の手から二百四十圓で買取つた所だそうで今は其の區全體の價驚く勿れ一二二〇〇〇〇〇〇圓諸君之でも吃驚し給はぬか、夫れかと思へば一坪何萬圓もかゝる此のマンハッタンの中へ長さ一里餘り幅八町の大公園が有る所に米國人の面影が惚ばれると云へば云へようか。夫れも其の筈ニューヨークと云へば家も道路も皆鐵か石か煉瓦かセメントで丸きり悪く云へば牢獄の様な所であるので稀には冷い土も踏み青々とした草や木を見る所がなくてはたまつたものではない。

之より汽車に乗り廣大な平野を西北に走り一日足らずで彼の有名なナイヤガラ大瀑布に達した、彼れ西行は東海道中富嶽を見て『來て見れば左程にも無し富士の山釋迦も孔子も斯くやありけん』と歌つたが今僕は此のナイヤガラの雄大なる觀に打たれ西行に反して『來て見れば豫想以上のナイヤガラ』と云ひたくなつた、其の偉大にして男性的なる星の世界彼の世の中はいざ知らず少なくとも現世に於て此の右に出づるも

のがあらふかと思つた。

抑も此の大瀑布はユリー湖の吐口よりオンタリオ湖頭に至る間に出来たナイヤガラが(幅半哩乃至三哩)のゴート島附近に於て非常な急坦に變じ其の間半哩水は河底を打つて跳躍奔馳し岩に激して泡沫飛散し喧々轟々終局遂に斷崖に達し飛流直下百八十尺懸つて以て此の大瀑布を造つたもので、西歴一千六百七十八年ヘネーバン神父によつて發見せられ爾來世の耳目を聳動するに至つたもので中央ゴート島により二分せられ西方カナダ側に在るものは其の形により名づけて馬蹄瀑と呼び幅千九百尺餘高さ百七十尺餘合衆國側のものを亞米利加瀑と呼び幅六百六十尺餘高さ百八十尺に達して居る其の音響の大なること百萬の雷一時に降るかと思はれ轟々ために天地は崩れ地軸は變ずるかと思はれ静夜順風に會する時は能く五十哩の遠き(バーリントン丘)に聞き得べく大地の震動周圍十五哩に達し朦々たる水煙柱は天に昇りて六色の鮮色を呈し能く七哩の遠きに於て認むべく一秒間に下る水重一億九千三萬八千七百五十貫に達し水力

實に四十五萬馬力と云はれて居る。

今此の壯觀をゴート島の對岸ナイヤガラ公園のテーブルロックに立つて見れば先づ瀑上の大急流は綠林之れを飾れるコード島及び其の附近なるバツス、三姉妹島ロビンソン、バードの諸島の岸を洗ひ其の水勢激烈なる今にも島一つ残らず噛み盡すかと思はれ脚下を見れば湛々として龍の住み家とも疑はる深淵は幽悽の極底無きかと思はれ懸涯より落下する巨流瀑底を沸騰混亂せしめ叫喚天地に轟き其の勢の猛烈なる、地球の爲めに裂けざるを怪しむ。瀑底轉落せし水は亂れて巨億の珠玉となりて轉々し雲霧此處に起りて谷地を掩ひ帯虹は脚下に現はれ五色爛然として飛瀑を彩る。

瀑布の奇觀は之に止まらず此處より六十尺を下り進んで瀑裏に達せんか絶壁は飛瀑と共に天然の大洞窟を造り一度其の洞窟に身を入れんか萬雷吼へて耳を聳し頭上斷崖の突端より地軸も傾けんする勢を以て萬石の水怒り下りて身前數歩に迫り後には千仞の斷崖高く懸り頭上を掩へる突崖今にも崩れんかと疑はれ氣壓瀑水の爲めに變化を起

し胸廓を壓し數秒にして將に絶息せんかと怪しまれ身は宛として奈落の底に陥りしが如く心魂忽ち去りて恍として吾が存在を忘る。嗚呼壯の極大の極造化の大、造花の妙誰か巨匠の天工に驚かざる者あらんや、ナイヤガラ瀑布の雄大さに肝を潰し急いで歸艦した。シカゴを除き米國も之で大體目抜の所へは行き盡したので愈々之から太西洋を横斷して英國に向ふ。

序であるから米國を去るに望み僕は行きはしなかつたけれ共有名なものを最も簡單に書いて置かふ。

米國の中央より少しく西に當つてワイオミング州と云ふ洲が此處、此處に黄石公園と云ふ東西五十四哩南北六十二哩面積三千三百餘方哩(五五〇方里)も有る一大公園が有る其の中央火山の水蒸気を吹くもれば吹き上げた水柱百七十八尺餘に達する大間歇温泉七十一も有り其の他幽邃を極むる湖水、奇拔なる峽谷、誠に其の壯觀奇觀には驚く許りで有るとのこと。又其の附近ヨセミテ溪コロラド大溪谷も世に珍奇なものの中に

數へられて居る。此處には切り立てた様な岩壁が八千尺も直立するものが有ると思へば高さ三千二百七十尺と云ふ素破らしく高い瀧も有ると云ふ事、又世界第一の長流ミシジッピ川の洋々として四千五百七十五哩を流れる等見るもの聞くもの總て珍奇ならざるはない。

扱て愈々四十六米突の巨像自由の像を後に見てニューヨークを解纜し再び渺茫たる太西洋の真中に乗り出でた。僕等は以前世界一の大海太平洋を横切つて居るので廣い太西洋も案外狭い様な氣持がして愈々英京倫敦に着いた。

此處は人口四百八十八萬餘外を合せたグレイター倫敦は七百四十三萬と云はれて我が九州の人口と殆ど同じで歐洲大戰前迄では世界一と云はれていたが今ではニューヨークに追い越されて第二位となつた。北緯五十一度三十二分西徑〇度五分に位し我が樺太の國境より少しく北に當るので通例なれば非常に寒い譯で有るけれど赤道近邊から流れて來るメキシコ暖流の續きヘーレンド暖流の爲めに暖められ日本の中部地方

位の氣候で有る、此の關係から倫敦は非常に霧が多く一年中日本晴の日は僅か十二日しかないとのことである、世界商工業の大都市であると同時に世界交通の一大中心となつて居る。

扱て上陸して見ると立派な自動車は澤山居るので僕等は何處かの貴族富豪を待つて居るのであらふ。嗚呼世が世で有れば彼の立派な乗り心地のよい自動車に身を寄せて倫敦見物に出かけるのであるがナート羨んでゐた、處が豈計らんや其の立派な自動車は皆僕等の上陸を今かくと待つて居たものであつた。棚から牡丹餅とは此の事か、ドーやら今年は風向きがよさそうなどと云はぬ許りの顔をして僕等一行は坐れば一尺程もひつこむ様なバネ仕掛の腰掛に身を乗せた。

柔い春の空氣の充ちた朝霧の中を爆音勇しく倫敦市中に送られた。暫く經つて車はピタと止つた、僕等は直ぐ大會場に案内せられた見れば何百人も一時に入る大きな會場。美しい五色の花は眞白いテーブルの上に飾られ今迄見たことも無い種々様々

の料理は順々と僕等の前に、立てば芍薬坐れば牡丹歩く姿が何とやら雪を欺く肌をした、英吉利美人の手によつて夫れから夫れへと運ばれるのであつた。聽てピアノヴァイオリン、マンドリン等の奏樂が起り、久米の仙人をして通を失はしめ三五の月も光を失はんかと疑はるゝ花も恥ぢらふ傾國美人のダンスは胡蝶の櫻花に戯るゝが如く片々として落花の舞ふが如く美妙を極めて僕等の眼前に初つた、音樂は足に合し手に合し或は高く或は低くダンスと能く調和して奏せられ僕等は宛然紫雲の上に天女の舞を見天女の歌を聞くかと疑はれ或は櫻花蘭然と咲き亂れ前も花、後も花右も左も又上も蘭滿たる花の吉野山に遊ぶかと思はれ或は満目すべて紅に淡き秋の夕陽を浴びて紅葉の高尾に遊ぶかと思はれ或はスミレ、レンゲの咲きはこる花庭の如き春の野に愛する友の手を取りて暖き五月の太陽に照らされ武蔵野の中に花を摘むかと疑はれ宛ら僕等は妖女の爲に魅せられたるが如くうつら／＼として眠るが如く眠らざるが如く醒めたるが如く醒めざるが如く唯恍惚としてしばし吾を忘れて身動きもせせに坐つて居た。

暫らく経つてダンス止み又奏樂止みフト吾に歸れば机の上に置かれた山の様な料理に少しも手をつけて居なかつたことに氣がついた。目に耳に口に僕等は十二分に歡待を受けて再び自動車で艦に送り歸された。僕等は此の親切にして盛大な英國民の歡迎を心の底からつくづく喜ばざるを得なかつた。僕等は倫敦に前後十日間滞在して、其の間交代で上陸を許され倫敦市中有名なもの、繁華な町は殆ど残らず見盡した、左に其の主なるものを書いてみよう。

先づ筆初めにロンドン中で一番繁華な所ロンドンシチーを書いて見やう、此の町は倫敦の中央に位し世界金融の中心市場とも云ふ可きもので日中の混雑と云つたら實に驚く許りで東西に走り南北に行き蟻の様に聯り蜂の様に集り人波打つてどよめき行く様は殊に恐しい程である。馬走り電車行き自動車行き自轉車行く。此の間を潜つて物を貰ふ乞食有れば世界的事業を企てる大實業家有り紳士有り職工有り婦人有り小兒有り瞬く間も無ければ、クシヤミする隙もないと云ふ有様じ、僕が先きを行く友を呼ん

だ處が百人一度に僕の顔を見た、又僕が手巾を取り出して鼻を拭ふた所が手を入れたポケットが他人のポケットで出した手巾は無論他人の物、知らずに拭ふた鼻が又他人の鼻とは餘り話が大き過ぎるが先づ／＼こんなものだ、肩と／＼押し合ひ膝と／＼がすり合つて甚しきに至つては火を發し人火事を起し時々焼け死ぬものがあるとの事名附之を膝火事と云ふと云つても之又話が過ぎて嘘と云ふこと火を見るより明であるが足先が地を離れ身が浮いて數間を飛行することは珍らしくない事實である。時には千百の馬車がギツチリ往來を塞ぐ事もあるが流石は秩序を守る英人、巡查の一舉手に依つて進退し整然として一糸亂れずの趣がある。晝はこんなに繁華な所も夜は番人の外居らぬ程の寂寞境に變ずる、これは異様に感ぜらるゝのであるが此處に事務を取つて居る人は大概郊外の住宅から通ふからで従つて朝夕の往來は實に素破らしい雜沓を起すので此所への通路に當つて居る倫敦橋等は通行人が一時間に二萬人車で行くものが三千人餘だから其の音が遠くで聞くと遠雷の様に聞へる。此の橋の創設は

遠く七八一〇年の昔で元は木造で欄干に罪人の首等を曝したものである相だが今のは七千餘年前に出来たもので其の費用一億圓毎夜電燈の光眩き程である。其の上に此の頃は又橋幅を擴げてをる、朝夕の賑はいは唯此の倫敦橋許りでなく各停車場も同じである。

ウエストミンスター寺院、之は誰も知る如く英國の王家や有名な軍人や、學者や詩人等の墓地で有る、始めは王や王妃の墓地として設けられたものだが後には一國の偉人傑士をも此所に葬つて其の偉功を表彰する事になつて英國氏は死後此の寺院に葬られるを最大の名譽として居る實に此の神聖なる寺は、一千有餘年の間に於ける英國民の光榮と品位との結晶である。中に這入つて見ると始は其薄暗い陰氣なのに嫌な感を起すが一度偉人の墓碑名を讀んだり故人の半身像や肖像等を見ると崇高の感に打たれて敬虔の念禁じ難くなるのである。さきに陰氣な庵室と見たのが忽ちに輝ける聖殿と化し去る心地がする。此の寺院に祭られてある偉人中には近時此の寺の歴史的價値と

靈的感銘を當國人に示すに勉めた——デーン、スタンレーを始め彼の萬有引力説を稱へ理學、天文學の根本を造つた不世出の英傑アイザックニュートン蒸氣機關の父ジエイムスワット不朽の文豪シェクスピア等英國の生んだ世界的偉人の總てを網羅して居る。

國會議事堂。院と並んで其の東方のテーキス河に建ち多くの尖塔や保壁で飾られゴシック式の大建築である、チャールズパークによつて設計せられ其の結構宏大、内外壯麗を極めたることに到底々々日本の議事堂の比では無い、尙ほ水清き河畔に建てられたる故其の外観は誠に美しい建築費用三〇〇〇萬圓時計臺の高さ三一八尺有名なピクトリヤ塔は高さ三百四十餘尺居室の數一千兩院中下院は議員の總數六百七十人もあるのに座席は四百六十七故に全員出席した時には立つて居る議員もあるが流石は立憲思想の普及した英國だけあつて秩序は我が國の議員の様にざはざした所は一點もなく整然として一糸亂れず私語する者は極めて聲を底ふし立ち歩くものは爪先丈で踏み

占めて行く議場に入出入する者は其の都度必ず帽子に軽く手を掛けて議長に黙禮をするとのことである。

序でだから倫敦市長の事に就て少しく日本の東京市長と特に趣きを異にした點を述べて置ふ、倫敦市長は年期は一ケ年で一ケ年の間宴會に出ること實に五百回乃至千回に達し其の俸給は一ケ年十萬圓だが一ケ年市長の職に在れば少くとも二十萬圓の散財を仕なければならぬとの事、で英國にての最も贅澤な三道樂中に數へられて居る。他の一つはダイビーの大競馬場で勝負を賭ることである。

塔橋タワーブリヂ。西歴八八五年の頃ノルマン人侵入した時アルフレット王のチームス河左岸に建た歴史を語る古城倫敦塔の直下チームス河には彼の有名なる塔橋が架けられてある長さ約八町ホレスジョネス、ウルフバアトラー、二氏に依つて設計され一六五〇萬圓の巨費を投じて造られたもので維持費として一年十五萬圓を要すと云ふ中央左右に二大塔を建て船の通行する時は小指の爪の様な釘一つ押せば其の間二百間も或る大きな

釣橋は水壓の作用に依て易々と中央の繼目は切れ上に上り丁度八の字の形に開く様に出来て居る。尙ほ此の間通行を急ぐ人は塔を登れば兩塔の間は又橋梁となつて居て安全に通行が出来る様になつて居る。一日の通行人平均約五萬人と云はれ倫敦の一偉觀となつて居る。

交通機關。高架鐵道、地下鐵道、電氣乗合車、鐵道乗合車、乗合馬車、乗合自動車等其の完備せる事世界第一である。就中地下鐵道は僕等の最も目新しく思つたもので地を掘ること數十丈チームス河底を潜つて東西南北に走つて其の狀宛ら蟻の巢の様である、英人も妙な眞似を仕出かしたものだ。此の地下鐵道に乗る時は停車場に行き昇降機或は石段によつて地下に行くのである。地下には切符賣口、新聞雜誌の小店、飲食店等並び煌々たる電燈の爲めに地下に在るを忘れるのである。さて目的地に達する時は昇降機によつて一度に二三百人一緒に路上に押し上げられ其の便利なこと地上諸車の及ぶものがない。次に目につくは乗合馬車で日本の馬車と異り二階造りで上下

共十二人乗が普通で凡町と云ふ町は此の馬車の通はぬ所はないので素より老人婦女の外は皆飛び乗飛び降りである、其の數一萬一千輛之に次いで鐵道馬車、電氣車又非常に多い餘りに馬車が込み合ふ時が巡查が白い棒を振り上げて一齊に止まらしめる。押し重なる馬車の數、數町に及び其の間を横切る人々猪の走る様である。以て其の雜沓の狀を知ることが出来る。

尚ほ倫敦で有名なものとしては博物館、セントポール寺院、全部硝子張の水晶宮、バツキンガム宮殿、公園としては、聖ゼームス公園、グリーン公園、ハイド公園、マタレジエント公園等があるが此所は略すことにしよう。然し倫敦の霧は有名なもので普通の日でも五六間先きは明でなく濃い時は一尺先も辨じかねるのである。然し倫敦の人は成る可く霧が深くないと落ちついて仕事が出来ぬとは誠に驚き入つた次第である。

僕等がこうして滞在中俄然一水兵の面白い手柄話を持ち上つて忽ち艦中の大評判に

なつた。夫れは或日の事一水兵が上陸し市中見物の途中國への土産、美しい繪葉書を買つて金を拂つた所どうした間違か釣銭が大分餘るのを主人は金を取り切りにしていくら待つても釣銭を渡して呉れぬので困つたのは水兵、之が日本店であつたなら先生額に青筋を立て怒鳴りつけるのであらふが悲しいかな、いくら頭をヒネツテあせつても見ても習はぬ御經で英語で話せる筈すは無い。マ、ヨ一圓や、二圓の目腐れ金膽を見せ男らしく思ひ切つて歸ろうかと思つたがチップ等なら他人に呉れてやれば夫れ相當に先方は禮でも云ふが此の度だけは先方が釣銭が要ると云ふことを氣づいて居ないから今大和男兒の大膽を見よとばかりに膽を見て其のまゝ歸りても其の膽たるや實に功能無き膽にして犬に見せるよりも馬鹿らしいハテ、どうしたらよかろうと先生一生一代の智慧を絞つて考へた、七轉八倒苦しみの上句、忽ち膝をたゝいて喜んだ、出し抜けて大聲で、モーニー、オバホール、ゴースタン、鬼の首でも取つた様な顔して高くもない鼻をウゴメカシテ斯ふ言つた、モーニーは發音は少し異つたが友人間に洒



落半分で用つて居たので錢と云ふ事はどうか知つて居たらしい、然しモーニー丈け  
では仕方が無い難題は釣錢と云ふ字と返せと云ふ字に有るので考へた上句フイト頭に  
浮んだのはオバホールと云ふ言葉であつた此の字に艦の中で能く餘ると云ふ意に用ひ  
られて居るのでコイツよいものが考へ付いたと大喜でモーニー、オバホールを一所  
にして見た所見事に餘つた錢即ち釣錢と云ふ字を造ることに成功した、所が困つたは  
折角釣錢が出来ても返せと云ふことを云はねば如何することか判らない、其處で考へ  
た所又一つピッタリ之に相當する字が出て來た夫れは海軍で能くゴースタンと云ふ言  
葉を『後へ返せ』と云ふ意に用つて居る。之ならば慥かに返せに違いないと思つて早  
速三つを組合して見るに『錢餘り返せ』之即ち釣錢返せになる、先生雀躍して喜んだ  
千苦萬苦、人間の一念と云ふものは恐ろしいもの、とうとう釣錢返せと云ふ字を造つて  
了つた。

店の主人も小首を傾けて暫く考へて居る様子であつたがニツコト笑ひ早速利錢を返

して呉れたとのこと、萬難を排して七轉八倒の上句頭がぐらくする程考へてとうと  
う成功したので有るから手柄話にするも御尤至極。

倫敦十日間滞在後僕等は歐洲重要都市見物を許された。先づ第一巴里に行く巴里は  
周圍三重の城壁より圍まれ長さ九里に達し附近に十六ヶ所の砲壘を築き要害甚だ堅固  
な都會で有つて流石は花の都、市街の美麗、繁華、建築物の壯麗宏大は世界中何處に  
行くも其の比を見ざる所有つて、世界の流行の根源となる所で娛樂機關遺憾なく設  
備せられ又巴里の民情の快濶と氣候の快和は相俟つて本市を世界一の娛樂都府とし  
たので年々來り遊ぶ者實に五十五萬の多きに達し其の消費する全額十五億フラン（五  
億八千五十萬圓）に達して居る、又美術に文學に繪畫に彫刻に其の他歌舞、音樂に於  
ても世界の中心をなして居る。

市の繁華の中心はコンコルド廣場で有る、長さ約二百間幅約百二十間でセーヌ河の  
清い流れに臨み其の廣場の中心には十餘丈も昇る大噴水が有り其の周圍には青々とし

た池が有り其の傍には埃及總督モヘメットアリの献じた高さ七十六尺の方尖塔が天を摩して立ち周圍には巨大にして精美を極めた數多の女神の彫刻が立てられ地一面は木片で固められ洗ひ清められて塵一本も無く、夜間は電燈、瓦斯燈燦然として白中よりも明かで眞に是れ世界都市中の都市と云はる、巴里市中の最華麗な所である。東に連なるチユイルリー公園とルーブル博物館こそ彼の蓋世の英雄ナポレオンボナバルトが全歐洲を己が脚下に服従せしめ覇を滿天下に稀へた思ひ出多い舊蹟である。此の廣場から直線に西に向つて行くと緑の樹木兩側に立ち並び坵々として砥の如き町が有る之ぞ有名なシャンゼリゼー街で道は中央が車道其の兩側には二列に並木が有り更に其の外側がコンクリートで固めた歩道になつて居る、並木の間には錦の様に美しい着物に包まれ嬉々として戯れる天使の様な小兒、世界の最新流行品にて滿身を飾り我こそ巴里社交界の花形なりと云はぬばかりの顔をした花を欺く佛蘭西美人、實に此所ぞ天國かと疑はる、本街の西端巍然として天に聳へて立つ。アーチ形の門こそ彼の大英雄奈翁

一世が一〇〇五年アウステルリッツに露、奥兩國の聯合軍を破つた紀念として建てられた彼の有名な凱旋門で起工は其の翌年で有つたが石造で高さ五十米突（二十七間三尺）左右の柱の幅四十五米突（二十四間四尺五寸）壁の厚き二十二米突（十二間六寸）穹窿の高さ二十九米突（十五間五尺七寸）と云ふ大計畫で有つたので奈翁生存中には遂に竣工せず一八三六年三十二年の歳月を費してルイスフィリツポ王に至つて漸く竣工したものである、四本の柱には出陣、凱旋、抵抗、平和を因んだ大理石の彫刻があり其の上にはナポレオンの戦争中の著名な出來事の光景を表はせる彫刻あり、中央の天井には勝利の神を浮彫し百四十四回の戦争の名及び三百八十六の將軍の名を刻んで有る門柱の壁の間に出來た二百六十一階の螺旋形の階段を登ると門の頂上に達すること出來此所から全市中を見渡すと十二條の大道は宛ら蜘蛛の巢の様なシャンゼリゼーコンユルド廣場の繁華さ等一目に見下されて其の爽快は論へ様がない。

次に當市のエツフェル塔は世界に有名なもので明治廿二年萬國大博覽會にエツクエ

ルと云ふ技師の手によつて建てられたもので高さ三百米突(百六十五間)實に世界最高の建物で材料は鐵條の組合せたもので頂上近くに眺望臺が有つて一九二七の階段及び電氣仕掛の昇降機によつて昇降自在になつて居る。此の臺から市中を見ればさしもに廣き巴里も一目に尙ほ郊外迄も瞰下される。頂上には氣象觀測所及び探照燈設備が有る、因に建築總費は二百五十萬圓で有ること、有名なものとしては尙ほ此の外にノートルダム寺院ポアードブ、ロニユ公園、國立劇場カルナル祭春季の花戦等見るべきものが非常に多い就中特に花戦は巴里特有の名物で之はポアードブ、ロニユと云ふ所に六月四五日の頃催されるので有らん限りの贅を盡し華を極めた衣裳で滿花飾を施した馬車に乗り芍藥薔薇小菊撫子菖蒲等の花を滿載し通る人の總てに花を投げつけ或は馬車と馬車の何千輛と入り亂れて投花の戦をなす等實に其華やかさは例へ様がない。花の都巴里は流石に其の名に背かないことをやると僕はつくづく感じた。往年佛蘭西に於て催されれ講和會議の議場ベルサイユ宮殿は此所を去る西南約五里

の所に有る同名の町に在つてルイ十三世の時創設しルイ十四世に至つて一億六千萬圓の國費を投じて造られたもので其の美麗實に世界無比と稱せられて居る。

巴里を出て彼の時計で有名なスイスに遊んだ。彼の不世出の英雄大ナポレオンの越へたアルプスの白皚々たる高峯を湖底に宿した深碧の清き湖水を見世界一の長隧道シンプロン隧道(長四里二十三町五十二間)を抜けるも亦一興湖水の美高く雲際に屹立して四時雪をアルプスの夕陽を浴びて紫に紅に輝く様、湖底に映た白峯の影を破り鏡の如き湖を、華かに着飾つた若き乙女の懐しき腕にオール取る様實に世界の避暑地スイスの眺は何年見ても飽き足らないと思つた

飽かぬ眺に惜き別を告げて獨逸の首府ベルリンに向ふ。

柏林。當市は人口二百萬を有し世界八位の都會で市街は清修廣濶で建築又雄壯美麗を極め大戰前迄は歐洲政治上の中心、世界學術の中心を爲して居た。其の最も繁華な町はウンテルデルリンデンと云ふ、名からして混雜を極めた町である、町幅三十三

間で東端は宮城、西端は凱旋門で有つて有名な伯林大學帝室劇場等壯麗を極めた廣大な建築物が立ち並んで居る、尙ほベルリンで特に他の都市と異つてをるところは全市の家屋は悉く五階に制限せられ高底なく鉄で摘み揃へた如く男女の服装は巴里倫敦に比して非常に質素で男は多く所謂カイゼル髯をピンと反し顔と云つたら決闘の創痕だらけ、此の創痕の多い程獨逸ではモテル相である、尙ほ學校の生徒は男女共に軍人様背囊を負ひビールの代りに水を飲むと云ふ奇抜極まる所で要するに所謂獨逸式一天張であるが大戦以後諸種の方面に非常な變化を起して來て居るとの事である。オースタリー、スエーデン、ロシア、ノルウエーには立ち寄らず僕等は再び海の上の人となつてスペイン、ノルウエーの西を廻つて英國の要害堅固に堅めた丁度日本の馬關海峡の如き地中海の咽喉とも云ふ可きジブラルタルの海峡を通り抜け地中海を東に走り伊太利のローマに向つた。

途中一寸面白い國が有る御紹介しよう、夫れは佛蘭西の東南隅に有るモナコと云ふ

國で面積驚く勿れ一方里餘、人口無慮一萬九千二百二十一人、日本の國が小さい／＼と思つて肩身狭い感がするが諸君大丈夫、意を強ふし給へ世の中にはこんな目へ入れる様な小さい國も有る。

主府をモナコと云ひ人口二千四百十人これこそは世界一の小國で一寸ポーシの國ではないかと思はれる、然し國全體が地中海に突き出て六十米突(三十三間)の斷崖は水面に吃立し岩根を噛む狂瀾怒濤に世の絶景とされて居る次に來る有名なものは之ぞ絶世の英雄ナポレオンを生んだコルシカ島彼の短い一生の間に微々たる砲兵大尉より身を起し果は歐洲の天地を蹄の塵と蹂躪した當時の盛況を思ひさてはワテレルローに秋風吹き初めて以來恨を呑んでセントヘレナの孤島の露と消へ失せた彼の心中を偲び轉感慨措く能はざるものが有つた、とやかくする内に艦は早やくも幾千年の古き歴史を語るローマに着いた、ローマはタイパー河畔に有つて其の昔歐亞の天地を侵略して全歐洲を併呑せんずる勢を有した彼の大帝國ローマの首府たる事數百年「永遠の都」「世

「世界の女王」と稱せられ一時は歐洲文明の中心として其の繁榮世界中何物も之に及ぶものがなかつた所であるがローマ帝國滅亡と共に何時しか其の面影は消え去つて今は唯旺盛なりし大羅馬帝國の一大墓墳として昔を紀念すべく残つて居る、昔を語る舊城壁は周圍十五哩を有し其の宏大さ實に昔の羅馬を偲ぶに足る、其の外セントピーター大寺院バアチカン宮殿コロセアムは三大建築物とされて居る。又一方羅馬以來の美術を殘し現今世界の美術的大都市とも云はれて居る。人口約六十萬、次は世界の奇街として有名なボンベイ見物に行つた。當市は紀元前(西曆)五百年頃より四百年頃にかけて旺盛を極めた所であるが紀元(西)百七十九年俄然附近なるベスピヲ火山が爆發し噴火三日間に亘り全市を皆埋めにし其の後歴史上すらも全く忘却せられて居たが千五百九十二年偶々其の建築物に掘り當て始めてボンベイの所在を發見され爾來三百年近く秩序なく發掘せられたが遂に伊太利政府の仕事として之れを大々的に發掘し學術上貢獻した所が頗る多い、當時市民は殆ど残り無く生き埋めにされしものの如く種々の様

をなせる人間の化石は發掘され見るも悲惨な状態を呈して居るものも有る、又一哩半に亘る長壁、頑丈なる石の土臺等在り在りと宏壯なる昔の當市を想像さす。殊に風俗の淫靡で有つたことは残つて居る壁畫にて知り得べく現今或場所の如き婦女子の入るを禁じて有所が有るとは可笑しい。

ボンベイ見物も終つたので我々は再び地中海に出で地中海最大の島シシリ島の東へ出でギリシヤ、トルコは抜にして一直線にスエズ運河に向つた。艦は程なくポートサイドに着いた。有名なスエズ運河は此處より始まり、スエズに至る迄四里其の間メンザレー、バルラ、チムザ、ビットルの四つの湖水が有る、(湖水の全長二十一哩)運河の幅は水面五十四米突(二十九間四尺二寸)乃至九十四米突(五十一間四尺二寸)河底二十二米突(十二間六寸)水深は十米突である。一八五九年佛人レセツヅに工し一八六九年(明治二年)開通した、總工費二億圓で有る。

アラビヤの大沙漠より出る赤い太陽を左舷赤珊瑚の出ると云ふ細長い紅海を通り抜

け洋々たる印度に出アラビヤ海を横切つてボンベイに向つた此の邊は熱帯圈内に入つて居るので中々の暑さである。扱て孟買に来て見れば聞きしに違はず黒んぼが眞白い齒をむき出して眞黒い顔の中で眼ばかりバチ／＼として僕等を物珍し相に見て居た、港内は非常に廣く水も深く天然の良好をなして東西の船舶は絶へ間なく出入して居る人口七十九萬を有し印度の第二の都會で有つて邦人も可成り澤山住んで居る、横濱より千三百三十哩有つて航程約一ヶ月で有る、此處よりは日本へ棉花を多く輸出して居る。

此處を出でて南航しコロンポに向ふコロンポはセイロン島の西海岸に在る良港で有つて人口十五萬六千世界交通の船舶は必らず此處に碇泊する、本港は西南風の吹く季節には浪高く船舶の碇泊に適しなかつたけれども一八七五年より十一年間の歳月を費し巨額の費用を投じて遂に人工的屈指の良港とした、然れ共沿岸は濤甚だ荒く波浪常に防波堤に上りて數十尺の高さに達し散じて水煙となり集つて瀑布となり港内に落下

する状恰も小雷の爆發するが如く其の壯觀奇觀到底筆紙の盡す所では無い。

クロンポに別れを告げて此處を出で更に東に航し世界一なるエベレスト峯の高く二萬九千七百七十二尺の雲際に聳ゆるを眼には見えねど心に視つゝ其の高峯の下に咆吼する獅子虎豹等の恐ろしい叫び聲を心に聞きつゝシンガポールに着いた。

殆ど赤道直下に位するので暑いこと夥しい然し炎熱は健康を害することがない。また當市は世界屈指の良港を持ち東西交通の咽喉に當り大船、巨艦當港に寄らないものはない。二十三萬餘の人口を有し年々十億圓の貿易が行はれる、日本の此處に支店を有する會社多く従つて僕等の市内見物中日本人に度々會つたので日本が近くなつた感じがした、元々此の町は英國が馬來半島の南端なるジョーホールの酋長を説き遂に一八二四年一時金十六萬圓及び年金四萬八千圓を拂ふことを約し之を譲り受けたものである。歸國を急ぐので南洋諸島は立ち寄らずフィリッピン群島マニラに向つて直航する、マニラはロンソン島に在り本群島の首府で人口二十二萬を有する思ひ掛ない繁華な

町で、マニラ麻マニラ煙草の輸出を以て有名である椰子や其の他内地で見る事の出来ん種々の熱帯植物の生ひ繁つて居る本島の景色は又格別で有る。之より支那海に出て西北に向ひ航すること數日にして愈々香港した、本港は英領に屬し一小島に在る港にして實に世界最良港の一つと云はれ東西往復の船舶の此處に寄港しないものはない。人口三十萬を有し西方の浮遊民を持ち東洋第一の貿易港で有る。全島殆ど平坦な土地はなく傾斜面耳から出來て居るので家屋は其の傾斜に添ふて建てられ道路は全島を繞つて開設せられ又水澱池を山頂に設け水道を引きケーブルカーの急坂を自在に昇降する等人工金を以て自然を破り無理に造られた町である。

香港を出て上海に向ふ・北航するに従つて堪へ切れない様に苦しかった暑さは次第々々薄らいで行く、今は既う一分一分日本に近着くかと思ふと懐しいやら嬉しいやらでもう胸は一杯になつて立つても坐つても居られなくなつた。さあ今少しで臺灣の澎湖島が見へると云ふので僕等は首を鶴の首程長うして今か今かと待つて居た。帆船を

見ては幾度か島かと思ひ雲を見ては又島かと疑ひ商船も見見るうちに追ひ越して島の如くに進んで行く艦も蝸牛の這ふ様に思はれ艦から飛び下りて水上を走つて行き度い様な氣持がした、目の疲れる程艦の行手をみつめて居ると遙か向ふ水と天と交つて彷彿として其の何れかを見分け難い波の彼方に雲か霞か吳か越か幽かに黒い物影が見へ始めた、望遠鏡を便りに見ればまごふ方無く之ぞ我母國の一端澎湖島であつた、さあ、こふなると乗員一同の喜びと云つたら見へた／＼と雀躍して喜んで居る。顔の色迄急に變つて來た様に思はれ艦内忽ち活氣づいて來た、薄い雲の様な島の姿は一刻一刻と明かに一分一分と大きくなつて遂に全島の姿を僕等の眼前に表はした。久し振りに日本の國我が母國を眼のあたり見た時の嬉しさは乳飲兒が何十日も別れて居た慈母の懷に抱き上げられた時の様な心持であつた、然し此の度は本島へ寄港せず直接上海へ向つた。

程なく黃浦江口に達した。此處より六里餘り溯り上海に到着した、當市は支那第一

の貿易港で數多の巨船を繋ぎ得東西兩洋交通の衝に當つて人口四十萬を有し支那貿易の中心として市街の繁華到底日本内地に有りふれの町の比で無い。

扱て愈々外國見物は之が最後之から永々住み慣れた吳軍港に向つて歸へるのである朝日を受け夕陽を浴びて行くこと數日にして模糊たる對馬は僕等の眼前に現はれた。之を見て日本に歸つたと云ふ實感を一層力強く感じた。嗚呼今暫らくで我が父母の兄弟の友の住む日本の土を踏み日本の山を日本の川を日本の家を見るかと思へば身は玄海灘の浪間に在れど心は早や幾百里の彼方母港の上に飛び去つて宛然白痴の如く浪のうねりを見るときもなく見ざるときもなく唯茫然と立ち竦んで居た。對馬を後に下の關をさして急ぐ僕等の心には其の一日が實に一ヶ月程に思はれたあゝ緑の山が！ 白い濱が！ 黒い煙が煙突が！ 町の家が！ 遂に艦は馬關海峡に入つた。

おゝ！ 懐しの我が日本よ！

一星霜が歲月郷が幸を如何ばかりか念じて身は太洋の眞只中にあるの日と雖も思は遠

く母國の空に走りて守るも攻むるも黒鐵の浮べる城の頼みもかゝりて我等が双肩にありと思へば御國の四方を血を以て守る軍人が胸には何時に變らぬ寄せては返す黒潮の洗禮を受けて、平和の女神の如く安立する母國の土を眺めては唯何と云ふ言葉もなく怒濤の中に木の葉の如く舞ひ狂ふ艦のハンモックの夢の中にも祈れる甲斐あつたと唯皇祖皇宗の守護を天に仰ぎ地に伏して感謝するの外は無かつた。

黒潮瀨をなして急なる馬關海峡も靜かに艦は瀬戸内海に入る。大小無數の點綴せる島嶼の中を針路は吳へ！ 吳へ！

思ひ起す二月上旬横須賀軍港を抜錨し靈峯富士が一刻一刻雲の中に隠れ行くあの英姿！ 水平線上に幽かに浮ぶ祖國の土の一塊は線となり、點となり瞬時にして消え失せたるあの一瞬間は船出の我等には如何ばかりか斷腸の思ひたらしめたることぞ。

異國の情緒にふれて若き男子が胸を抱いて如何ばかりか母國の慕はれて砲彈煙雨の中をも物の數とも思はぬ此身にも今我が父母は健在なりや、我が兄君の如何に在すや



我同胞の幸や、いや大なれかし。遠く思はず 天皇陛下萬歳と叫びしこの幾度ぞ。  
思へば我が航跡流の繁みにも劣らで萬感交々胸に至り思はず甲板に立ちて流れ行く青  
浪と遙かに白砂青松を眺めて暫しは無言。翼も有れば、飛んで行き度い程の心切な  
こと。

フト我れに返ればあたりは甲、乙、丙、丁夫々に紅の血潮音立て、其の青春の程も  
知れる満顔に笑を浮べて遙かに見へ隠れする町を指して「見へた〜」で全員甲板に  
立ち塞がり手の舞足の踏む所を知らず破顔大笑其の騒ぎ恰も火事場の如し。其の一瞬  
の心持とても口にも筆にも盡し難く希くば實地に就きて味はれよ。だ。

守るも攻むるも黒鐵の、

浮べる城を頼みなる、

浮べる其の城日の本の、

御國の四方を守るべし、

眞鐵の其艦日の本に、  
仇なす國を攻めよかし、

岩磐の煙は海神の、

聲かとはかりなびくなり、

砲彈打つ響きは雷の、

聲かとはかりどよむなり。

萬里の波濤を乗り越えて、

御國の光輝かせ、

軍樂隊が奏する、唳々たる響きを乗せたる船、胸にせき上げる嬉しさと胸一杯に包  
み切れぬ喜びの笑を満面に浮べた家族の者を乗する船は浪間に響く機關の音さへ、僕  
等一同を祝福するが如く、打ち振る白き手巾一振りにも喜の波を打たせて僕等の顔前  
に近着いた。船上寝ねては夢に醒めては現に可愛き我が子の安否や如何にと一星霜を

案じ來つた歳波寄りし老母の曲れる體を思はず伸し嬉し涙を兩眼に宿して瞬もせず我が艦をうちまもるあれば、雨の夜、風の朝、心にかゝらぬ時のなかつた最愛の夫の健全な姿を見んと踏む足場さへ浮き／＼と心も空に夫は何處と鬢のほつれも氣づかずに我が艦を一心不亂に見つめる、いとし新妻もある。斯くする内艦は一年振りに懐しの母港吳軍港に悠々其の雄姿を現した、碇泊中の數多の友艦顧れば僕等の安着を祝する爲め全員悉く舷に立ち並び萬歳々々の祝福の響き天地に轟き港の山々に響き渡りて木靈を返し全港爲めに崩るゝかと疑はる其の歡呼の聲の眞中に泰然として富嶽の如く投錨した。

艦長の懇篤なる心盡しにより僕等乗員一同僕等の家族と共に艦内の大廣間に招待され一家團欒全艦團欒の大慰勞會は催される。泰山より重き國家の大任を双肩に擔ひ、愚かなる身の幸に一點の禍失なく首尾よく重任を果し得、一日離れても案じられる父母に會い、或は慈愛溢るゝ兄弟に會ひ又愛着の念いや勝る最愛の妻子に會ひ嬉しさ喜

ばさし懐しさ、慕しさは一時に胸に關き上げて何と云つてよいやら、言はんとして一言をだも出し能はず百貫に餘る重荷の一時に双肩より下りし心地してホト一息ついたまゝ沈黙、しばし唯熱淚數行双頬に流るゝ耳。

## 一八、楽しい歸郷

休暇は海兵に取つて此の上もない楽しいものである。何分海兵は艦船に乗り組み海上に生活をするのが本分であるから日頃郷里に歸ることが出来ぬ、従つて休暇と云ふものに特殊の趣味を持つ様になつて来る。

海軍の休暇は夏、冬の二回に分たれ休暇日数は夏が十五日以内、冬が十日以内尙ほ航海を百日以上續行した時は航海休暇と稱して十日以内、看護休暇と稱して父母妻子が重病の時若しくは死亡の場合に於て相當の手續をなし、往復日数を除いて二週以内の休暇を與へられて充分に看護が出来る様になつて居る。之れ以上尙ほ休暇を要する時は引き続き前に許された休暇日数と通算して二十八日迄では許されるのである。演習又は檢閲の後に於て慰勞のため短時日の休暇を與へられるのである。

又碇泊中は普通、日曜、公暇日、海軍紀念日に午前八時より海上陸上勤務を問はず

其の艦其の部隊の人員の半數に對して上陸外出を許可するので、通常之を半舷上陸、外出と稱するのである。

善行章、行狀の區別が有つて善行章は一線から五線迄で、行狀は三等行狀から一等行狀迄に分たれ善行章一線以上の下士官同二線以上の兵は隔日に上陸、外出泊を許可され一等行狀にあつては四日目毎に二等行狀にあつては六日目毎に外泊を許可され三等行狀に有りては半舷上陸、外出、夜間は各自の勤務所に歸ることになつて外泊は許されないのである。然れ共一ケ年未満で二等行狀に進み外泊を許さる様になる。

休暇が二つ以上有る時は併合して許可するのであるから數多くの休暇を一時に得らるゝのである。

看護休暇の願出には次の様な手續を要するのである。父母妻子の重病なる時は戸主の願出に醫師の診斷書を、死亡の時は町村長の證明を附して艦長又は分隊長宛に願ひ

出づるを要す。

休暇を許可される前日の嬉しさと云つたら逆でも、拙い筆や言葉などには現はすことは出来ない寢床に就いても國の家や家のまはりの景色などあり、と目に浮びさては兩親兄弟などのニコニコ顔で自分を迎へて來れる時の様子など夫れから夫れへと想像されてとうとう一夜中一睡もせず夜を明すのである。さて愈々休暇を得て國に歸る。

鍬や天秤棒或は肥桶擔いで印度のクロンボの様な顔をして手足といへば土だらけになつて毎日々々汗と油に働いていた自分が色も割合に白くなり上等の羅紗の意氣な水兵服や金文字の入つた水兵帽に身を堅め御負けに歩く度にギュー／＼となる靴を穿いて歸つたものだから毎日一所に田の中でたわいもない世間話に興じ合つ、鋤鍬取つて居た友人に道で出會つたが先生ケゲンな顔をして自分の顔をジロジロと眺めて容易に口を開かないので、

『よう吉ちやん久し振りぢやのハシ』

と聲をかけると吉ちやん急に立ち止まり目を丸ふして肩の上の鍬を卸ろしつ、彼は言つた。

『ありや庄さんかよ、よう歸つたのうシえらい風が變つちよるもんぢやけ誰れぢやろ何處の人ぢやろかと思ふて見よつた機嫌がよかつたかよ』

『やあ有りがとう御かげで息災にやりよつたをまんくにや皆御機嫌ぢやろ』

『やあ皆機嫌がようてのうシ——ときにをまんどうして戻つたぞよ』

帽子を脱ぎポケットから半月布を出し汗を拭きながら、

『夏休暇を十五日も貰ふてのうシ早速に歸つて來た今年鮎はどんなことぞよ』

『そう、今朝行ててつしり取てきちやるけに丁度ぢやよ是非今晚やつて來久し振り

で一盃やろうぢやないかまだヨサコイと箸拵た忘りやあすまいのうシ』

『忘れるもんか此の頃手を上げちよるぞよ、それぢや折角ぢやけに遠慮なし行ふ、を

まん相も變らず左は忘れまいのうし、わしやあ相變らず左はさつぱりいかんけに箸で御相手をするのでよ一拳もをまんや取らさんぞよ」

「いゝな何時も負けよつたくせにをまんがなんぼ海軍で鍛ふて來たち土佐が本場ぞよ箸拳は、やらん先きからあんまりえらそうにいひな一拳も取らさんたあんまり出が太い、牛の糞ぢやあるまいし。兎角まあ今晚やつて來て面白い海軍話を聞かしようせ、夫れが何よりの頼みぢやよ。ぢや又晩に——」

斯くして吉に別れ歸る道すがら數人の舊友と出會ひ前の様な會話が次から次へとかはされた軍人と云へば陸軍の軍人より外に見たことのない村の子供達は兵隊さんといつたら鐵砲かついで靴穿いて背囊脊負つたカーキ色の服を着た人許りと思つて居るので僕を見て物珍らしそうに、又懐かし相に澤山後について歩いて來たが一人として兵隊さんと云ふ子供はなかつた。こうして家の前迄で來て見ると老母は近所の子供に引ばられつゝ、ニコ／＼顔で門の處に立つて居た。

『庄や歸つたか』

喜びと慈愛とに満ち／＼た聲で嬉し涙をこぼさん許りに聲をかけた。風につけ雨につけ寝ても醒めてもどんなにして暮して居るかと一日として案じない日の無かつた母の達者な姿やニコ／＼とした顔を見て僕は思はず瞳を濕した。買ひ集めた手土産の包を解いて久し振りに父母と同じ一室で語る楽しささては親友を訪ひ昔物語に日を暮す愉快さは何枚書いても盡き相にない。

殊に村役場や小學校を訪問すると今迄では鹿爪らしい顔をして居た村長さんや校長などが下へも置かぬ手厚い遇しをして呉れるので海軍の難有さが泌々と感せられた。

毛利元就は死に臨み我が子を枕邊に呼んで數本の弓の矢を示し以て一致共同の必要なる事を順々と説き聞かした。又昔より支那に於ても天の時は地の利に如かず地の利は人の和に如かずと即ち戰に於て味方に取り如何に時期はよくとも敵が要害堅固な天險を要して防ぐ時は到底之を抜く事が出来ない。然し其如何に要害堅固な天險によつて之を防ぐと雖も之を防ぐ敵に一致共同なく攻むる我に秩序整然一糸亂れざる一致共同有る時は由吾れに地の利なくとも忽ちにして其の要害を陥落することが出来るといつて居る。之は誠に永久不滅の眞理であつて現今の戰に於ても全く之と同じことである。即ちいざ戰鬪と云ふ場合には幾十の軍艦、幾千の兵員は司令長官の一言半句にも背かず唯司令長官を頭腦とし他は皆目となり口となり鼻となり耳となり或は胴體となり手となり足となつて一糸亂れず秩序整然として立ち働かなければならない、

過ぐる日清、日露の戰に於て皇軍が眼醒むるばかりの大捷を博したのも之全く祖先傳來の大和魂に加ふるに我等幾千萬の人民が一天萬乘の英帝明治大帝の御大心を己が心とし能く和衷共同した賜と云はれて居る。されば我が海陸軍が幾千年來外國より唯一點の汚點をも受けしこと無く幾千年來の光輝有る歴史を有し巍然として一萬二千尺の蒼空に聳へ古往今來不朽不滅なる彼の富嶽の如き我皇國の安泰を計る可き大任を有する以上は一致共同の必要なること誠に火を賭るよりも明かである。之實に我海陸軍に於て各兵員間に階級なるものを生み而して上官の命には絶對に服従す可してふ言葉の生れ出でたる所以である。

如何となれば若し萬一兵員たりとも一言半句上官の命に對して我が意見を述べぶるが如きこと有る時は之機敏を要する戰に於て既に貴重なる好機を逸し尙ほ其の上に戰の生命とも頼む共同一致を缺き引いては戰局に甚大なる悪影響を及ぼし唯其の一語有りたるが爲めに再び取り返しつかぬ敗北を招き稍もすれば我が皇國の存在を脅かす

やも計る可からざるが故である。かるが故に海陸軍に於ては階級を重要視すること甚しく縦一階級たりとも上官なる時は之を見ること神の如き観がある。

抑人間たるものは一分一厘たりとも他に優越せんと欲するものにして之全く人間本能の然らしむる所、凡そ人間として此の世に存在するもの、免る可からざる現象である。然して既に述べたるが如く軍人に於て上官を見ること神の如き以上兵員にして一階級たりとも進級せんと欲する事宛ら農夫の大旱に於て雨を得んとする感が有る。斯く上官たる者が下の階級の者に神の如き尊敬を受くる以上上官は又其の尊敬を受くるに足る可き人格と學識、技能を持つ者でなければならん。此處に於て海軍には將校以外の者に對しては如何なる下階級に在る者と雖も苟も一階級進めるには果して其の人間にして然るべき價値有りや否やを調査する爲め嚴密なる試験が行はれて居る。此の試験は三月九月上旬の二回に限られ試験成績発表は五月一日、十一月一日の二回にあるのである。試験前數日一同の緊張振りと云つたら想像の出来ない程で日頃

はタワイもない呑氣話より外に話の無い友でさへ會へばムキになつて此の度の試験には之が出やうか、あれが出やうかと頻りに心配して居る様子、愈々試験の前日になれば遠き故郷の氏神様に願掛けて吉を祈る有れば夜更けて舩に出で南妙法蓮華經々々々々々々としきりに念ずるも有る。いつもならハンモツクに就くが早いか直ぐ前後不覺に眠り込む連中も何だか近所に火事でもある様な氣持がして仲々急に眠れない、明くれば恐ろしい又嬉しい試験日廣い試験場に集つた一同の胸の鼓動は刻一刻と高まつて行く氣分は緊張に緊張を生んで殺氣立つ愈々問題が出た、友人の顔を見ればセンブリでも飲んだ様なニガイ顔、飴でもなめた様なホク／＼顔、實に取り／＼の眺めである斯くて試験発表の日が來た唳々たる喇叭の音に總員キチンと規律正しく甲板上に立ち並ぶ進級した下士は順々と辭令を手渡される、さあこうなると僕等の心は迎も落ち付かない、胸の鼓動は幽かに聞える程戦く足を踏みしめて今か今かと待つ、二人呼び三人すみ五人、十人——もう呼ばないかと、——

悲観は一つも待てず、まだ後と大分残つて居る、そんなに見捨てたものでもない悲観六分に樂觀四分に大きな息もようせずにかたづをのんで士官の顔を一生懸命穴のあく程見つめて居るとオ、嬉しや今聲高々に讀み上げられしはまごふ方なく之ぞ我が名川村庄助の四字であつた。ア、永い／＼間炎熱焼くが如き三伏の暑さを凌ぎ烈風肌を劈く嚴冬に極寒と戦ひ陰陽なく骨を惜まず孜孜として勉め勵みし甲斐ありて見よ朝日に輝く月桂冠は今や我が頭上高らかに飾られた。オ、何等の喜び何等の快樂か、之に加へん、今の今迄胸を閉せし暗雲は爽と吹く春風に吹き散らされて影もなく身は陽々たる春光を浴びて百花爛漫と咲き亂れたる春の野に梢々を飛び渡り花間をくぐつて啼き遊ぶ小鳥かと疑はれ唯洵然として酔へるが如く手の舞ひ足踏む所を知らないと云ふ有様であつた。

或る年の十一月であつた、今日は試験の成績が發表されると云ふので例の様に甲板上に規律正しく立ち並んだ、將校の呼ばれる名を一字漏らさず慄く胸を押し體め一生

懸命に聞いていたが下士官進級者の辭令は一枚去り二枚濟み五枚十枚と取り除かれ今か／＼と待つ甲斐もなく遂に將校の口から呼ばれなかつた。先には一刻も早く吹けよかしと祈つた解散喇叭も今は一刻も遅かれど願ひ先には一節々々我を祝福するが如くに思はれし喇叭の音も今は其の一言一言我が胸を刺すが如くに思はれて友は皆進級の嬉しさに喇叭の音と諸共に踏む足取も軽々と胡蝶の舞ふが如くに飛んで行つた、自分の胸を閉した不案の雲は忽ち變つて憂鬱の黒雲となり身も足も石の様に重く、ズルリ／＼と引きずる様に兩手を組みうなだれて己が部署に動いて行つた。

斯う落膽の淵に陥つた後僕の心の奥深くには次の様な幽かなれども最も力強い嚴かな叫び聲が聞えた「汝は如何なる目的を以て海軍に志願をしたのか！ 眞に國家の干城となり國家の安泰を計る目的ではなかつたのか！ 一兵として働いても一大將として働いても之れ等しく國家に盡す所以にして其の精神に於ては何等變りのある可きものではない、進級せざれば國家に盡すこと能はず、進級すれば國家に盡し得と云ふが如き事



何處に有りや。進級否進級之實に徹々たる問題ならずや苟も帝國の軍人たる可き者か  
る些事に拘泥するとは何事ぞ！」

『ア………！………そうだ！そうだ！』

今迄頂垂れ鬱々として樂しまず物思ひに沈んで居た僕は眼前に神が現はれ嚴然とし  
て我を叱りしが如き感に打たれ春雨のミシリ／＼と降り續く憂鬱なる五月の空の急  
霽れ渡りしが如き心地して頂垂れし首は忽ち上り胸の憂も一時に消えてハタと膝を打  
つてニツコと打ち笑ひ意氣陽々として勇しく又元氣よく一心不亂我が任務に従事した  
明治天皇の御製にも

國に盡す道に二つはなかりけり戰の道に立つも立たぬも

とある、僕は此の御製を思ひ出で

國に盡す道にかはりはなかりけり上大將も下兵卒も

と畏い事ではあるが云はざるを得なかつた。まして階級一つ位の差に至つては全

と論ずる餘地がない、僕はこう思つてから此の方やれ進級、非進級とワイ／＼騒ぐ連  
中は之れ實に小膽極まる小人否眞に國家に盡すと云、眞心の無い人間であると思ひ我  
等苟も赤心より國家を愛する者、度量の大なる男子の執るべからざる所と考へ進級等  
物の數とも思はず甚に國家を守る帝國軍人の大精神に副ふべく努力した。従つて陰と  
か陽とか云ふ言葉も全然僕には論外であつた。

然し悲哉我が海軍にはまだ此の些細な問題に拘泥する者が往々にして有る否然耳  
ならず實に淺ましくも吾が努力の足らざるに氣づかず、却而罪を他人に歸し女々しく  
も之に怨恨をいだく等潔白たる可き軍人として實に有るまじき考へを抱く者が有る、  
尙ほ甚しきに至つては自暴自棄に陥り身を持崩し其の結果種々の罪に問はれる者さえ  
ある、之誠に卑む可きの極にして我は日本國民に有りながら我が國家を愛するの赤心  
なきものなりと天下に公言するものに外ならず。我が國民にして我が國家を愛する赤  
心無きものは之れを非國民と稱ぶも敢て過言ならざるを信じて疑はない。既に非國民

たる以上帝國の守護の衝に當る可き名譽有る軍人たることを得ざるや論を俟たざる耳ならず日本國民としても吾人の之を許容し難きもので有る。故に寸毫にても非進級を悲しみ或は自暴自棄に陥るが如きものは一刻も速に我が軍籍を去る耳ならず、我が國籍をも去る可しと余は斷言して憚らない。

要するに進級し能はざる者は唯單に進級を唯一の目的として働くものにして國家を思ふ赤心より働く念殆ど無きものである。静夜徐ろに我が本心に立ち返り其の據つて來る所を熟考する時は必らずや思ひあたる所有る可く之無くば未だ熟慮の足らざる所以にして更に深く之を沈思默考する時は必らずや何處にか其の然る所以を知るのである。之を輕々しくも何等我に歸りて自ら質す所なく唯徒らに其の責を他人に歸せんとするが如き者を唯一人たりとも我が軍人間より出さざる可からざるに至りし事は之れ我が帝國の爲め衷心より遺憾とする所である。

然し此處に一考すべきは人間は神にあらざる以上完全無缺なるものではない、何人

雖も生涯一つの禍だに無くして終る者は皆無なる事明である。此の故に或は精誠意國家を思ひ赤心を吐露して陰陽なく立ち働き其の人格に於て學識に於て將技能に於て些の批難無く何れの點よりも進級仕得べき眞價を有する者が神ならぬ上官の萬萬一の見誤にて進級し能はざる者の有る事も之皆無なりとは斷言し能はざる所である。此處に於てか吾人は須らく大いに熟考しなければならぬ、元來階級なるものは之れを要するに此の者には之れ之れの眞價ありと云ふ事を外部に表示せんが爲に吾人に附せられたる一つの徽章に過ぎざるものにして吾人が如何に金蘭錦に身を着飾るも馬鹿は依然として馬鹿にして又觸るれば落ちん襤褸の中に身を包むも偉人は依然として偉人である日本の生みし總ての英傑中の英傑、偉人中の偉人と云はれし彼の西郷南洲が官に在りて金絲燦爛として光眩き陸軍大將の大禮服に身を飾りし時代も野に下り質素なる木綿の單衣一枚に犬を連れて山に狩せし時代も大西郷は依然として大西郷にして其の兩者に於て何等西郷の眞價に變りなきは諸君の等しく認むる所であると同様に

諸君の眞價を外部に表章する徽章即ち階級なるものは之大将と云ふ階級を與へらるゝも亦四等兵と云ふ階級を與へらるゝも自己の眞價に於ては寸毫の變り有るべき筈がない。

かるが故に首尾よく進級したる者と雖も内に顧みて其の眞價無き時は之れ宛ら木猿にして冠し白痴にして錦を着ると何等選ぶ所無く須く眞の男子にしてかく心附きし時は自ら申請して原級に下るを至當とすべく又一方前述の如く上官の萬萬一の見誤りより進級し能はざる者は之偉人にして自ら權をまとへると同じく大西郷の野に下り狩せしと同じく其の眞價に於ては首尾能く進級仕得たる者と何等異なる所無く且つ大将として國家に盡すも四等兵として國家に盡すも國家に盡す眞價に於て何等輕重なきものなる以上世の非進級者は何の故如何なる理由を以て非進級を悲み又歎くものぞ。斯く論じ來れば進級すればとてさ迄喜ぶに足るものに非ず、せざればとて斷じて夫を眼中に置くべきものでない。

されば進級したる者にして内に顧み我が人格に於て學識技能に於て自ら眞に其の價値有りと認めし時は日頃よりの刻苦勉強空しからず愈々我が眞價も他人に認めらるゝに至りしかと心中竊かに喜ぶは可なるべく、進級し能はざる者は宜敷く沈黙考熟慮再三、其の然らざる所以を探究し専心其の短所を補ひ我が眞價を増進すべく赤心以て國家に報ずるの大精神に基き眞に價値有る帝國の軍人となり以て幾千年來燦として光り輝く歴史を有せる我が國家をして更に一光榮有らしむべく奮勵努力せなければならぬ。



一備考 朝鮮、關東州、樺太、臺灣に在勤する時は別に加俸増加せらる。

此度の増額は下士官兵に在りては約九割強で有る。

(ロ) 加俸

航海加俸、役務を有する軍艦、驅逐艦、其の他の艦船に勤務するものに對し俸給の外に給與せらるゝので日本沿岸、外國沿岸又は遠洋等によつて支給額に相違がある。又驅逐艦、潜水艦、水雷艇、飛行機等の乗組員は軍艦よりも多額の加俸を給せらるゝことになつてをる。其の額は特務士官にあつては一日三圓七十五錢以内、准士官は二圓二十五錢以下下士官は七十五錢以内で兵は四十七錢以内で有る。

特修兵加俸 下士官兵が學校若くは練習所等に入り特別の技術を修め特技章を與へられたものゝ内、規定のものに對しては一日七錢五厘宛支給せらるゝのである。

優等章加俸 艦砲射撃、魚形水雷發射、汽釀、通信術等の檢定に於て優等の成績を得たる者には優等章又は優等徽章を授與せられ其の種類によりて一日十五錢以内の加

俸を給せらるゝのである。

善行章加俸 善行章の數に依り一線に付き一日一錢五厘宛の加俸を給せらる。其の數は一線より五線迄で有ることは休暇歸省の所で述べた通りである。

教員加俸 學校、練習所、海兵團等の任に當る下士官に對して俸給の外に一日七錢五厘の加俸を給與せらるゝのである。

ハ) 手當

宿舍手當 艦船部隊にあらざる各廳に勤務を命ぜられ又は陸上に外泊を要する時は下士官にありては一日十錢、兵にありては一日六錢の手當を給せられ、潜水艦の乗員となりて其の艦又は母艦に宿泊すること能はずして外泊を命ぜられたる時は一日兵二十五錢以上下士官四十五錢迄での手當を給せらる。

勞働手當 下士官、兵、潜水の事業に従事する時は其の就業時間の長短によりて一日一圓以内、艦底、汽罐内部、機關底部、水罐底部の掃除及艦船に於て石炭搭載の際

石炭庫内の事業、難波船又は漂流人の救助及前各號に準すべき非常なる勞働に従事する時は一日二十五錢以内。又熱帯地方其他炎熱の場所に於て機關部の汽釀事業、厨房の事業及び北緯三十度以南の陸上に於て汽釀中の機關部作業に従事する時は一日十二錢以内の手當を給せらる。

被服手當 准士官に任用された時は二百五十圓、特務士官が各科少佐級に任用された時は約百三十三圓の被服手當を給せらる。

支度手當 准士官以上の者航海四ヶ月以上の豫定にて艦船に乗組み遠方に航する時は左の支度手當を給せらる。

准士官四十圓、特務士官四十五圓、

(ニ) 扶助

海軍志願兵の家族に對しては扶助金として一ヶ月一圓五十錢を毎年二期(三月九月)に前六ヶ月分を在籍鎮守府の經理部から支給せらる。

(ホ) 被服物品

入團の時に渡される被服は決して寒暑に對して不自由を感ずるが如き不完全なるものではない。而して嚴寒の地に在る者には防寒服を交附し長靴を貸與され酷暑の地に在る者には麥藁帽を貸與さるゝので有る。

各兵種により多少の差は有るが大體に於て左の通りで有る。

軍服	三着	下着	冬二着、夏三着
夏服	三着	靴	二足
外套雨衣	各一着	靴下	六足
帽子	二個		

使用の結果破損すれば直ぐ交換せらるゝも其の期間が満了して始めて交換することになるのである。破損直ちに交換せらるゝものを無年期品と稱するのである。従つて期限の有るものは定期交換と稱するのである。

食事は海軍省醫務局に於て兵員の體格、年齢、勞力等の關係より精密なる研究の上にも研究を重ね以て制定せられたるものなれば衛生と云ふことに就ては毫も遺漏なく實に完全無缺此の上無しで有る。而して其の量額を一人一週間の分量として定められ之を毎日調理して與へらる。

海軍の食事は普通一般のものに比べて餘程上等で有ると云つて差支へないので有る其の上軍醫官が點檢を行ひ副長、主計長が調理を直接に食はれて檢せらるゝのであるから食事の爲めに病氣を起すが如きは斷じて無いのである。海軍が生れて以來食事のために病氣が起つたと云ふことは未だに艦團通じて無いのである。飲用水も必ず一度沸騰せしめたものに非ざれば飲用せしめないものであるから兵員は適當な滋養分を食し適當なる勤務に服するため數年の後には身體著しく發育して強大となり、全然別世界の人の様になるのである。所で一回の食事に如何程の分量を料理するかと云ふ

と千三百名位の乗員有る軍艦に於ては米一石八斗、獸肉六十八貫、麥七斗、魚肉四十三貫、麵麩七十四貫、野菜百六十貫で有る。

此の内獸肉魚肉は午食と夕食に交互に給し麵麩は毎週四回飯に代へて給せらるゝので有る。艦團隊には酒保の設備が有つて定められたる時間あり、此の時間の範圍内に於て自由に菓子や酒類を酒保から各自の帳面で買つて食することが出来る。尙ほ此の外日用品は何でも有るので普通の需用には支障がないので有る。

以上の如く海軍の給與は衣食は總て官給であり住居は已れの城であり其の上俸給、加俸、手當等相當に支給されるのであるから決して別に金錢の必要はないのである。新兵と雖も決して俸給で不足を感じる様なことはないのである。然し萬一素行修まらず或は酒食に溺れ遊興に耽るが如きことあれば忽ち金錢に不足を告げ動もすれば事實を捏造して父兄に送金を請ふ者もあるが是れは自己の品行の不良を父兄に告白するに等しく甚だ不心得の所業である。

十	十	十	十	十	十	十	十	十
九	八	七	六	五	四	三	二	一
年	年	年	年	年	年	年	年	年

一、 二、 四、 九	一、 二、 三、 八、 四	一、 二、 三、 七、 九	一、 二、 三、 七、 九	一、 二、 三、 七、 九
六、 二、 三	六、 四、 九	五、 九、 四	五、 九、 二	五、 八、 六

二一、恩給並に叙位叙勳

(イ) 恩給

軍人の恩給は文官の十五ヶ年と云ふに比して僅かに十一ヶ年以上の勤務で受くること  
 とが出来、又十一ヶ年以上勤務しなくとも戦争警備その他外國に航海すると之が加  
 算されて早く恩給を受ける資格が出来、現役を離れてから其の官等、勤務年数に應じ  
 て下賜するもので詳細は左表の通りである。

退職恩給表

増 率	官等(職名)	
	三〇	大將
二〇	中將	將官
三〇	少將	將官
四、七	大佐	佐官
五、三	中佐	佐官
五、七	少佐	佐官



二十九年	三十年	三十一年	三十二年	三十三年	三十四年	三十五年	三十六年	三十七年
------	-----	------	------	------	------	------	------	------

二、三三〇	二、三二〇	二、三〇〇	二、二八〇	二、二六〇	二、二四〇	二、二二〇	二、二〇〇	一、一八〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

一、八七二	一、八六二	一、八五二	一、八四二	一、八三二	一、八二二	一、八一二	一、八〇二	一、七九二
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

一、六三八	一、六二八	一、六一八	一、六〇八	一、五九八	一、五八八	一、五七八	一、五六八	一、五五八
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

一、一七〇	一、一六〇	一、一五〇	一、一四〇	一、一三〇	一、一二〇	一、一一〇	一、一〇〇	九、九〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------

九、三六	九、二六	九、一六	九、〇六	八、九六	八、八六	八、七六	八、六六	八、五六
------	------	------	------	------	------	------	------	------

一、七〇二	一、六九二	一、六八二	一、六七二	一、六六二	一、六五二	一、六四二	一、六三二	一、六二二
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

二十年	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年	二十七年	二十八年
-----	------	------	------	------	------	------	------	------

二、二五〇	二、二四〇	二、二三〇	二、二二〇	二、二一〇	二、二〇〇	二、一九〇	二、一八〇	二、一七〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

一、八〇〇	一、七九〇	一、七八〇	一、七七〇	一、七六〇	一、七五〇	一、七四〇	一、七三〇	一、七二〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

一、五七六	一、五六六	一、五五六	一、五四六	一、五三六	一、五二六	一、五一六	一、五〇六	一、四九六
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

一、〇五〇	一、〇四〇	一、〇三〇	一、〇二〇	一、〇一〇	一、〇〇〇	九、九〇	九、八〇	九、七〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------

一、二八七	一、二七七	一、二六七	一、二五七	一、二四七	一、二三七	一、二二七	一、二一七	一、二〇七
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

六、三二	六、二二	六、一二	六、〇二	五、九二	五、八二	五、七二	五、六二	五、五二
------	------	------	------	------	------	------	------	------

年數	特務		年數	特務	
	官等	官		官等	官
五十年	特務大尉	特務中尉	五十年	特務大尉	特務中尉
三十九年	九七五	七四〇	四十九年	二、九四〇	二、八三〇
三十八年	七九四	六〇七	四十八年	二、九二〇	二、八一〇
三十七年	五九一	四七九	四十七年	二、八八〇	二、七七〇
	特務少尉	准士官			
	六〇七	三六八			
	三五七	二一八			
	二七五	一六八			
	特務士官	准士官			
	九七五	五二八			
	七九四	四〇五			
	五九一	三〇六			

四十六年	二、八五〇	二、七三〇	二、六二〇	二、五〇〇	二、三八〇	二、二六〇	二、一四〇	一、〇二〇
四十五年	二、八二〇	二、七〇〇	二、五九〇	二、四七〇	二、三五〇	二、二三〇	二、一一〇	一、〇〇〇
四十四年	二、七九〇	二、六七〇	二、五六〇	二、四四〇	二、三二〇	二、二〇〇	二、〇八〇	九六〇
四十三年	二、七六〇	二、六四〇	二、五三〇	二、四一〇	二、二九〇	二、一七〇	二、〇五〇	八四〇
四十二年	二、七三〇	二、六一〇	二、五〇〇	二、三八〇	二、二六〇	二、一四〇	二、〇二〇	七二〇
四十一年	二、七〇〇	二、五八〇	二、四七〇	二、三五〇	二、二三〇	二、一一〇	二、〇〇〇	六〇〇
四十年	二、六七〇	二、五五〇	二、四四〇	二、三二〇	二、二〇〇	二、〇八〇	一九〇	四八〇
三十九年	二、六四〇	二、五二〇	二、四一〇	二、三〇〇	二、一九〇	二、〇八〇	一九〇	三六〇
三十八年	二、六一〇	二、四九〇	二、三八〇	二、二七〇	二、一六〇	二、〇五〇	一九〇	二四〇

二十三年	二十二年	二十一年	二十年	十九年	十八年	十七年	十六年	十五年
二八四	二八四	二七六	二七三	二六三	二六〇	二五二	二四八	二四〇
二六三	二六〇	二五三	二四八	二四〇	二三六	二三二	二二二	二一八
			二二二	二一八	二一六	二〇二	二〇〇	一九六
			一九九	一九三	一八九	一八七	一八四	一八二
								一五七
								一四七
								一三六

年數	官等		増率
	下士	官	
十四年	二二八	二二六	10.0
十三年	二二四	二〇〇	10.0
十二年	二二二	一九六	10.0
十一年	二〇八	一九六	10.0
増			10.0
	二六八	二四七	10.0
	二四七	二二六	10.0
	二〇六	二〇〇	10.0
	二〇八	一九六	10.0

免除恩給表

「備考」本表右側ハ舊年額左側ハ更正年額本表ハ年額ノ最下限ト中央ト最上限トヲ示シタルモノデア其  
 一年間一ケ年毎ニ若干宛進加セラル、ノデアアル准士官ニシテ一級俸ヲ受クルモノハ恩給ニ付  
 テハ特務少尉ノ額ヲ受ク特務士官ハ全ク尉官ノ恩給ニ同シ

二十四年	二四六	二六六
二十五年	二五〇	二七三
二十六年	二五四	二八六
二十七年	二五八	
二十八年	二六〇	
二十九年	二六二	
三十年	二六六	

若し恩給を受けて居る者又は恩給を受くるの資格有る者が死亡した時は其の遺族は扶助料を受くる事が出来る。扶助料は戦死者の遺族にありては恩給と同額、公務死

亡者の遺族にありては恩給の三分の二、その他の者は恩給の三分の一で有る。恩給資格年数は十一ヶ年で有ることは前に述べた通りで有つて加算さるゝ規定は次の如くである。

- 外國戦に従事したる者は 一ヶ年に付二ヶ年
- 内地に於て職務に従事したる者は 一ヶ年に付一ヶ年

居留民保護又は警備の爲め外國に航海したる者は 一ヶ年に付一ヶ年半  
以上の表は大正九年増額されたもので此處には特に新舊對照表に依つて如何なる程度迄増額されたかを示したのである。

此の増額を以て完全とは云へぬが之には第一國家財源の問題其の他の關係上よりして今日では平均七割の増額に止まるも尙ほ將來に於ては額其の他不備の點に向つて改善さるゝことと思はる。

此の度の改正で最も痛切に感じた點は、從來は名譽進級と云つて満期の際進級をさ

せられた。今は名譽進級と云ふ制度はなくなつたけれども満期に際して進級せしむることは従前通りである。つまり名譽進級で無く普通の進級である。故に名譽進級の時に有つては全く名譽許りで恩給は元の官等即ち名譽准士官で出れば依然として一等下士官の恩給を受けて居たが之からは満期に際して進級した官等に對する恩給を受くることになつたのである。従來の恩給改正は其の効力の及ぶ範圍に制限を附せられたが此度の改正によつて斯る制限は絶體になく平等に行はれることとなつた。

(ロ) 叙位 叙勳

叙位には恩給の様に加算の特典はない。其の官等の如何に不拘在職十五ヶ年以上に及ぶ者で其の起算點は判任官(下士官)となつた時からで三等下士官は從八位、二等下士官は正八位、准士官、一等下士官は從七位に叙せらるのである。特務士官に在りては其の進級に從つて何處迄でも上れることに改正せられた。

叙勳には加算の制度が有るけれども恩給の場合とは少しく異なつて居る。恩給の加

算には兵の間の勤務を減せざるに叙勳に在つては半減即ち其の二分の一を減するのである。

叙位、叙勳を得るに要する年數は各々官等に依つて異なり詳細は次の通りである。

准士官は滿十年以上、一等下士官は滿十一年以上、二等下士官は滿十一年半以上、三等下士官は滿十二年以上で有つて何れも勳八等に叙せらるのである。而して特務士官となれば其の進級に從ひ何處迄も進むことが出來准士官は勳六等、下士官は勳七等迄進むことが出来る。

一三、服 役

今日世界大勢の上より見て海軍の任務の愈々重且つ大なる事は論ずる迄もない事であつて世界各国が競ふて内容の充實に努めて居る。國家急務の一つと云はねばならぬ大事である。

陸軍に於ては海に戦ふと云ふ様なことは先づないと云つてもよい位であるが海軍は其の様な單純な譯には行かない時としては無關係の觀有る陸戦にも従事せねばならぬ場合が生ずる。故に下士官兵として修得すべき事も自然繁雜を生じ海上戦は勿論或は陸戦隊として陸に戦ふことや守備の任に當る等或は居留民の保護、商船の保護と云ふ様なこと迄で及ばねばならぬ。如此任務の範圍が非常に廣く且又之を修得するに非常な混雜が伴ふので有る。故に陸軍の様に二ケ年や三ケ年の年限では到底役に立つ様になれず、それでやつと一人前になつた頃には既に現役を去るべき満期の時期となつ

て居ると云ふ鹽梅である。海軍が陸軍に比して年限の永いこと及び志願に重きを置き尙ほ特修兵の養成に努める所以のものは實に原因茲に存するので海軍に志す壯丁に此の眞意を會得し我が海軍の爲めに宜しく盡すべきである。

區別	常 備 兵 役		後 備 役 補 充 兵 役	第 一 國 兵 役
	現 役	豫 備 役		
下 士 六 ケ 年	大正九年四月一日以後任官の下士官の豫備役は四ケ年			四十歳迄
志 願 兵 六 ケ 年	下士に任せらるれば下士に同じ現役に服したる期間を通じ十二ケ年			
徵 兵 四 ケ 年	三 ケ 年		五 ケ 年 十 一 一 二 ケ 年	
參 考 (陸軍徵兵)三ケ年	四ケ年四ケ月		十 ケ 年 四 ケ 月	

現役満期となつて後尙ほ海軍に於て國家に盡さんと欲する者は再服役の志願を爲し許可されるれば引き続き續いて海軍に勤むることが出来る。此の志願は満期三ヶ月前に一定の形式に依つて再服役の願書を提出する様になつて居る。一期を二ヶ年とするので再服役を許可される者は平常品行端正に身體強健、志操確實技術の衆に秀でた者である。これ等の要件全く備はりたる者は原則としては許可されるべきものであるけれ共人員都合其の他の事情によつては此の原則に例外を見ることがも有るが之は極く稀に見るの現象に過ぎない。

特修兵は特修兵の任務上普通の満期時が到來するも満期を取ることの出来ない場合が生じて来る。普通の満期時に對して餘分に勤める様な具合となる。下士官、兵は之を稱して普通一般に義務年限と云つて居る。

此の義務年限を具體的に云へば、規定の義務復役が假りに大正十年の三月三十日の特修兵卒業後の服役義務が同年十二月三十日であつたとすると此の普通現役満期の大

正十年三月三十日は満期に非らずして十二月二十九日迄勤め十二月三十日即ち特修兵卒業後の服役義務満了の日を以て満期となるのである。此の場合の九ヶ月といふものが所謂義務年限で有る。故に學校に早く這入れれば義務年限無くして済むこととなる。

二三、後悔先にたゝず

或る時は自らの失敗を語り又或時は海軍の内情を語り私に公に秃筆を呵して此所迄来たのだが餘り長くなると本書をして欠伸造製所の一部たらしめんことを怖れ云ふべき幾多のことを割愛して満期前後の感想に筆を進めて見たいと思ふ。海軍兵の多くはまだ浦若い十七八多くて二十一二の時に入團したもので一家に居ては父母の指導の下に立ち働き世の中にはどんな荒い風が吹いて居るやらどんなに恐ろしい怒濤が逆巻いて居るやら一向に知らない者が多い夫れが故に動もすると自分の責任を果す事より外何の心配も無く又種々様々の變化の身邊に迫る一般の世間と比べて割合に單調な尙ほ働かうが動くまいが一寸自分の意のままになり想に思ふ世間に比してより、嚴格な規律の下に身を委ねて居る軍人生活を目して單調である、無意味である片苦しいと云つて一寸も早く軍人生活から飛び出して活社會に一花咲かしてやらふ、あゝもしよう

こうもしようと世の中は自分の思ふがまゝに如何でもなると全で打出の小槌でも持つて居る様な考をして一にも二にも社會に出やうとする者が有る。然し世の中がそふ濡手で粟のつかみ取りと云ふ様な調子なもので有つたなら此の世に一人の不平者、一人の貧乏人無く一人の生活難を訴へる者も無い筈で有る、満期前に十分沈思熟考し胸に確固として動かざる成算ありと確信せし事も恰も登山に於て其の初め「之位ひの山へ」と其の易々と考へた事がさあ登つて見ると中々さう易々と登れるものでなく道には迷ふ食料は缺乏する、水は無し其の上句遂に往年コブシ嶽に於て演せられしが如き慘劇が演せられる様になると同じくいざ實行となつて來ると此の登山に勝る數倍の困難が伴ふて到底満期前に立てた豫算通りには行はれぬ事になるのである。

僕も全く其の中の一人たることを免れない。或はこんな悲惨な敗北は多くの満期者中には取らなかつた者も有るかも知れんが然し自分が餘りに悲惨を極めつゝ有るから人もそうだらふと想像するのである、前車の覆るを見て後車を戒めよ、僕の如く満期



後に漸く眼醒めて満期前の考への至らなかつた事を覺つた前車の轍を履まぬ様に今から十分思慮を定めて後始めて進退すべきもので之が國家の爲めにも影響ある以上尙ほ更に一倍の慎重なる態度を取つて貫ひ度い。然し自分は徒らに現役に止まることを押し唆かすものではない。只要は自己現在の地位と生活状態と満期後に於ける將來の見込とに十二分の注意と考慮とを拂ひ事を早計に失せざる様戒むるに過ぎないのである。即ち只單に満期後に於て徒らに不安な生活に甘んずるよりは寧ろ其の儘現役に止まり一意専心奉公以て國家の爲めに盡瘁せられん事を勸むるのである。満期後慣れぬ浮世の荒波にもまれるよりは寧ろ安らかな温き國家で母の手に抱かれ終身國家護衛の大任に殉せよと云ひ度いのである。之が個人のためならず國家の爲め即ち一舉兩得とは此の事である。若し僕の言に信を置かずして徒らに早計に走り現役を去らんか、後悔する時の來るや必らずで而も其の悔恨は永久に續くので有つて之丈は斷言して憚らない所である。論より證據満期後社會の新生活に這入つて一花咲かせ様として目的を

達した人士が幾人か有る、之を見ても解るではないか。如何に社會の荒波が海上生活に味ふ甲板を舐むる荒波より恐猛なるかは想像以上である。

此の上は満期後の感想と云ふも寧ろ事實とも云ふべきものだらふが此の事實有つて始めて此の感想が起るのである。此の満期前の感じが満期後に如何に大なる差異を生ずるかには僕自身最後の實驗に據つて證據立てることにしよう。

僕は満期前三年即ち大正四年の事の有つた法律研究を志し満期後は大ひに自由の天地に此の武器を以て活動しやうと決心した其の時の胸中は實に何とも云へない程愉快であつた。希望に満ちた成功の夢が震氣樓の様に目前に表はれて獨り微笑を漏らさずには居られなかつた爾來三ヶ年間、法律の法の字の意義から始めて其の研究を續け愈々大正七年の四月も半を過ぎた、さあ今暫で歸郷と云ふので吳の町で「トランク」やら家庭への吳土産を購め歩いて歸る日を待たつた。漸く大正七年の四月三十日と云ふ日は來たのであつた。今日こそは愈々待ちに待つた現役満期除隊となるの日だと思ふと朝

の食事も何だか名残り惜しい様な又嬉しい様な感じもした希望に満ちた自然的な快心の笑を漏らさずには居られなかつた。同輩やら分隊内の者共と共に、とある料理屋に袂別の楽しいやうなそうしてうら淋しい様な三時間を送つた。自分の分隊長は可成り感情家で有つた。それ丈け涙もろかつた。自分の除隊になることを惜むと共に男泣きに泣いて呉れた。今迄十三ヶ年の永い／＼間互に助け又助けられ着いた手紙も見せ合ふて親の様に又兄弟の様に睦しい月日を送つた親友や分隊長の涙に濕つた眼を見ては今迄持つて居た希望の喜びも何時しか消え去つて別離の悲しみは續々と胸に込み上げてあゝ自分を愛し恵しんで呉れた分隊長とも又一本の煙草すら分けて飲んだ親友とも今宵限りかと思ひ、思はず僕の双頬には熱い涙が流れ言葉さへ胸にせいで出し得ず云はふと思つて居た事も、ろく／＼言ひ得ないで唯涙ながらも男らしく立ち上りつまる言葉を強いて『では随分御機嫌よや道は異つても國家の爲めに……』と後はよう言はずに東と西に袂を分つたのであつた。

斯ふした名残り惜しい一日を過して翌日早朝歸郷の途についた、汽車の窓より友の打ち振る帽子の影の刻一刻と幽になり細くなつて行くのを見送つた時の僕の心の中は悲しいとも淋しいとも又苦しいとも云ひ様のないやるせない思ひで一ぱいで有つた、汽車の中汽船の中僕の胸には今分れた分隊長友の顔故郷の父母、兄弟さては望み多い我前途等何もかもが入り亂れて浮び來り何時何處を通つたやら唯夢の様に過ぎ去つて亂れ狂ふ萬感を胸に抱いて生れ故郷に立ち歸つた。にこやかな父母の顔、喜ぶ兄弟に會ふと今迄住み慣れた吳を懐ひ友を慕つて沈み勝て有つた自分は急に元氣を得て曉の夢から醒めた様な氣持になつた、それと共に、やゝ薄らいで居た希望の焔は再びむらくと猛烈な勢で燃え始めた、愈々同年五月意を決して上京する事となり次で首尾能く駿河臺高く聳ゆる彼の明治大學に入學の光榮を擔ふ事が出來た、斯くて漸く明治大學の正門を丈けはくぐつたが此の時から最う覺悟はして居たものゝ忽ち社會の荒波は足下から用捨無く攻め寄せて來た。即ち自分には入學に先立つて先づ第一バンの問題

があつた、是より先き兼ねて吳鎮守府の人事部長松山爲麿少佐の御紹介で東京越中島町の商船學校に就職、明治大學に通ふ事に略ぼ定つて居つたから、五月廿五日の朝永い旅に疲れた身を東京「ステーション」に投げ出さるゝと其の足で直ぐ商船學校に行つた、門衛に名刺を出して案内を乞ひ都合能く學生監に會へた松山少佐からの紹介状を出し漸くのことと晝間通學朝夕の勤務を約して奉職の榮に預つた。但し之には自分に取つては餘り有り難くない條件附のもの即ち當座の缺員埋めに満員になる迄と云ふ誠に不安な解除條件の雇傭契約をした。此様調子で不安な奉職は辛ふじて十二月下旬迄で續いた。同月廿一日愈々解除條件は成つて僕は御閑の身となつた。翌廿二日該校を退いて今度は苦學力行會の御世話になる様になつた、此處に初めて書生羊羹サツマ芋の味をも知つた。此んな調子で飯の爲めの不安を續けつゝ八年六月下旬から東京砲兵工廠の守警になつた。隔日勤務で従つて隔日通學と云ふ風で飯の爲めの不安を續けつゝパンに追はれて主眼で有つた勉強の方は殆ど不可能と云ふ迄の破目に陥つた。

現社會は斯うして僕を苦しめた而も尙ほまだ飽き足らず世間一様では有るが丁度飯の問題と同様に物價騰貴果ては急激な思潮の波迄一所になつて來た、茲に於て現社會に食に苦しむ者僕等許りでなく十に對する七乃至八を以て算せられ殊に中流以下の家庭に於ける悲痛の叫びは何處迄續くのか全く見當がつかぬ有様であつた。

衣食住の問題に苦しみつゝ有る市民の多數は社會、工場、同盟罷業或は怠業、甚しきに至つては某大學の教授連の増俸運動の有つた事實を見ても明に社會の複雑と苦しさ加減が明る、實に想像以上で有つたので有る。茲に於てか軍隊生活の秩序整然に且つ生活上安全なるを追想して今更の様に羨望の眼を眺かざるを得ないのである。されど時既に遅し後悔は先に立たず。僕の現役に今一度服し得らるならば……と思つた事の幾度なるかを知らない、諸君定めし嘲笑するならんも斯此悔悟の情を以て居る者は當に僕一人耳ならず、恐らく満期者の殆んど全部が此の感に打たれた事有らふと信ずる。

現役に在つては此の様な心配は決して無いのである。何となれば社會に於ける景況は時々變動が有る論より證據歐洲戰役が大正三年に始つて以來社會の人氣は非常なもので種々なる成金が澤山急造的に出來たが大正十年の今日に至つては財界の大變動とやらで今度は前の正反對に身代限りをする者が續々出來て來た、斯る一方軍隊に於ては如何で有るかと云へば、恩給は下士官、兵に有つては十割も増され、俸給も亦之に伴ふて増額された。此様にして一度増された額は社會の景況の様に変動することは無い。若し變動すれば増額さるゝ一方決して減額さるゝ様な事はないのである。此の意味よりして軍隊は安全で有ると云ふことが出来る、故に衣食住の問題は國家てふものに依つて安全に保障されるので有るから軍隊生活が如何に社會生活の現狀より安全で有るかが明るであらふ、天下泰平とは實に此の事である。此の意味に於て軍人生活に優る生活をして居る者は稀であると言つて差支ないであらふ。故に諸君自ら沈思黙考而して事を決すべしだ、現役に在る諸君は或は職に飽き一時的社會の現狀を見て景

氣のよき事だと云ふかも知れんが其れは客觀的皮相な斷定であつて誤まれるも亦甚しきものなりと言はねばならぬ。然れ共僕は前にも述べた如く徒らに現役に止まり或は再復役を勧告するものではない。只將來に於て不安な生活を爲さんよりは寧ろ現在に止まる事を諭すもので有る。而も是が國家の爲めのみならず諸君の生活上の安定の爲めにも利益なるに於てをやである。

諸君は壯丁時代に於て大なる希望と決心を以て海軍に志願せられ一意専心君國の爲めに盡瘁されたものなれば實驗すべき社會生活を経ずして社會生活に没交渉の海軍生活に入れるものと見る可きが至當であらう、故に尙更今日の如き不安な社會の現情を見て、折角堅固の意思を持つて安定な位置に居りながら輕卒なる早計に失し強て不安極まる社會生活に走るが如きは思はざるの甚しきものにして所謂飛んで火に入る夏の虫の愚を敢へてするものと云はなければならぬ。

尙ほ附言せば最近の社會狀態の如き一時誠に好景氣なりしも戦後は漸く其の動搖

を見るに至り社會状態は時々刻々に其の變遷を重ね假に現時眞に好景氣なりとするも何時急轉直下の大變動を來すやも計られず。又此の好景氣に乗じて一仕事せんと忙々事業を開始するとも其の十中八九は略準備が成りさあ今からと云ふ時には既に世の景氣は下火になつて居て結局蛇蜂取らず否取らざるばかりでなく非常な缺損を蒙るものであることは從來の歴史に徴するも又此の度の經濟状態に就て見ても實に明な次第である、かるが故に如何に世間が好景氣なればとて決して追つてはならない、其處には諸君の來るを待つて居る恐しい落し穴が造られて有るのである。

經濟上より見るも將世界の大勢より見るも活社會は軍隊生活に比し數倍の暗闘を重ねる事實火を見るよりも明である。茲に於てか單純なる表面的觀察に依つて決して自己の進退を決する勿れ、根據薄弱なる自己の獨斷に依つて徒らに空想に走り一攫千金の夢に憧れて何處に恐るべき落し穴の有るかも辨へずして危険極まる社會に出んより寧ろ着實にして安全なる軍隊内に止まりて專念國家護衛の大任を全ふす可く努

力せられんことを、僕は諸君に前車の轍を踏ましめない爲めに茲に敢へて苦言を呈する次第である。

右は實に僕の満期後の結果即ち失敗したる現在の境遇より得た感想で有るが現役に在る諸君、能く僕の此の感想を味ひ事の早計に失せざる様熟考せられん事を國家を思ふ赤心一片の老婆心より僕は茲に自己の恥辱を滿天下に晒し敢へて諸君の判斷に訴ふるものである。幸にして之が諸君の前途に對し幾分なりとも貢獻する所が有るならば國家奉仕の意味に於て僕は無上の満足を感じる次第である。

## 二四、同情の極み

海軍は陸軍と異つて其の兵員を全國に於ける壯丁の志願者中より其の優秀なるものを選抜して採用することになつて居る。故に志願者の多少は直接海軍の實質に大なる影響を及ぼす事は誠に瞭な事である。多少に不拘海軍志願兵の減少を來たすと云ふ事は我が海軍に取りて最も憂ふ可き事態である耳ならず四面海を廻らせる我が帝國に取りて看過す可からざる重大なる問題たるを免れない。然るに此の重大にして且つ吾人の最も憂ふ可き海軍志願兵減少問題は今や當に吾人の眼前に疑も無く現はれて來て居ると云ふことは敢て僕の言を俟たずとも明にして國を思ふに切なる我が同胞は既に心附かれて居る所であると信じて誤りない。茲に當つて此の問題を解決す可く努力するは我等日本國民としての義務であり又吾人の憂慮せざらんとして憂慮せざる能はざる所である。之余の淺見薄學をも顧ず敢而一書を顯し普く天下の人士に衷心を訴

ふる所以である。

そも何の爲如何なる理由によりてかゝる重大なる問題が忌しくも忠君愛國を精髓とする我が海軍に起りたるか、乞ふ余をして一言論せしめよ。

世界三聖の一と迄云はれて居る彼の大聖人孔子も衣食足つて禮節を知ると云ふて居る、如何に國家を思ふ赤心より身を軍籍に置き國家護衛の任に當るものと雖も之等して人間である。既に人間である以上物質慾に走るや之れ論を俟たない所である。故に如何に献身國家に報ずるの精神有りと雖も軍籍に入りて物質的の報酬あまりに薄弱なるに反し社會の好景氣なる時は「脊に腹は代へられん」てふ下世話も有る通り勢ひ志願者の減少するや誠に瞭な事實である。然るに翻つて我が現在軍人の報酬如何と云ふに誠に局外者すら默認に堪へざる程の貧弱さを見せて居る。之れ實に現今海軍志願者の數を減少せしめし一原因たるを免れない。元來軍人は一意専心君國の爲めに盡すので有つて勿論他に何等の副業無き爲め物質上別收の途の有る可き理由が無い。然る

に一方何等の受くる俸給の薄弱なる爲め蓄財の出来得べき筈もなく恩給とても其の額些して大ならざるが爲め之れ耳を以て一生涯の生計を保つ事を得ざるが如き状態である。

殊に吾人の最も遺憾に感じ又同情に堪へざる事は特務士官及び准士官の満期後に於る有様で有る。此の方々は殆んど總て三十年内外永き日月を國家を思ふ一念より肌を劈く烈風を冒し鐵をも盪す酷暑と戦ひ陰陽無く一意専心海軍の爲めに盡され以て五十前後の老齡に達せられし方々にして海軍に取りては誠に勳功少からず精神誠意以て衷心より感謝しなければならぬと同時に満期後は其の餘命を何不自由なく安々と樂しみ得べき物質的の報酬即ち恩給を與へて然る可き方々である。然るに前述の如き恩給額なるが故に安全なる生計をたてんが爲めには此の老齡にして尙ほ勞力を費さねばならぬ様な状態に有る。之を他に用ふる時は老後安々と餘命を樂しむに足る準備を爲し得べき貴重なる壯年期の全部を擲つて國家の爲めに盡し以て此の老齡に達せる者

にして満期後生計の道を開く爲め尙且つ勞力を費さざる可からざるが如きは誠に吾人の見るに忍びざる所又人道上黙許す可からざる事と云ふを得べし。かるが故に俸給並に恩給の増額は之れを人道に上より見るも一日も急を要する所にして又一方現役に於ける待遇を良くし老年満期に際し餘命を保ち得べき財力即ち恩給を充分に給與せば満期後に於ける生計上の心配は絶無となるが故に安じて軍籍に止り得可く自然再服役者並に海軍志願者の數も増加す可く何も殊更に口を極めて、やれ再復役せよ、やれ海軍を志願せよと説かずとも期せずして志願者は雲霞の如く集ひ來り我が海軍内容の充實に對して多大の好影響を及ぼすや論を俟たざる所である。されば俸給並に恩給の増額は我が海軍の隆盛を計る爲め引いては國家の安泰を期する爲め實に重要にして急を要する事たるを免れない。流石に當局も之れに注目せしものゝ如く大正九年第四十三議會に於て俸給並に恩給の大改善を爲し幾分か吾人の慾求を満したる所なるも未だ到

底吾人の満足とする所に非ず宜敷く今一段の大改革を施さん事を切に希望して止まないものである。

## 二五、新聞を見て

大正九年二月九日國民新聞の報ずる所に依れば「海軍志願兵の年々歳々減退するは満期下士卒の口に有り云々」と明記されてあつた。之を一見せし時の僕は宛ら晴天に於て霹靂に會したるが如く又振らば露散る鋭利なる短刀を以て胸を差し通されしが如き感に打たれ我が海軍々人に限りては此の如き事斷じて無しと思ひ又新聞社の捏造なることを信じ乍らも海國の前途を思ふの餘り敢て此處に苦言を呈する次第で有る。乞ふ幸に余の心事を諒せられよ。

凡そ吾人が一事を爲さんとし其の事に關したる智識を求めんと劈頭第一に走るは之疑もなく其の事の經驗者の元である。此處を以て見るも如何に經驗者の言が吾人に對し重大なる價值を有し又如何に吾人の心理状態に甚大なる影響を及ぼすや誠に火を睹るよりも瞭な次第である。されば、火の無い所に煙は立すとかや、新聞の報道する



處にして幾分なりとも其の由る可き事實有りて世の海軍志願者の最も信頼する經驗者  
即ち滿期の下士官、兵の口より一言たりとも海軍に對する悪口出たりとせば之れ誠に  
由々しき問題にして吾人の斷じて看過し能はざる問題である。然し乍ら余は軍籍に身  
を置く事十有三ヶ年幸に我が海軍々人の眞情を十分に會得したる者なるが故に斯る  
事實の全然無根なる事を知るに難からざるものである。

日本が海國である以上海軍思想普及の必要なるや此處に至る迄余の千萬言を費して  
論じたる所、而して此の海軍思想を普及せんが爲めには只に海軍一個の力に俟つ可き  
に非ずして兩大に於て傘と雨下駄を必要とするが如く他に雨下駄となりて之れを援助  
す可き社會なかる可からざるや論を俟たざる所、而して社會に於ける海軍思想普及の  
根源は之れ一にかゝつて海軍滿期兵の双肩に有りて其の一言一句は海軍思想普及に對  
し實に重大なる關係を有するものである。かるが故に幸にして滿期兵の末席を汚すこ  
とを得たる此の川村庄助は海軍思想普及の爲め終身献身的に粉骨碎心の努力を厭はざ

る覺悟と決心を以て不肖なる身をも顧みず敢て一書を著はし一方海國同志會なるものを  
設立し廣く日本國中に亘つて海軍思想の普及に努力しつゝ有るのである。

如斯滿期兵の社會に於ける海軍思想普及に對する地位は誠に重要なるものなるが  
故に希くば全日本の現役諸彦よ現時に於ては誠意赤心我が海軍の爲めに力を致し他  
日滿期を得て社會に出たる時と雖も現役に於けると寸毫の變りなき熱誠を以て海軍思  
想普及に努め萬々一海軍部内に於て不満を抱くが如き事有りたりと雖も不平は不平と  
して永久に自己の胸中奥深く之れを秘め斷じて之を口外し海國の爲めに悪影響を及ぼ  
すか如き事無きを期し先年國民新聞に現はれしが如き記事をして全然此の世より葬む  
り去らしむ可く努力せられ以て海軍の隆盛を圖り引いては幾千年來燦として光輝く歴  
史を有する我が大日本帝國をして永遠に泰山の安きに置かしめ大にしては全黄色人種  
先導の大任を全からしめんことを。

附 録

二六、海軍兵志願心得

我が帝國の海軍兵として心得べき事は澤山で到底言ひ盡せぬ程有るが今茲には其の大體に就而述べやう。既に御承知の通り海軍は志願兵を以て主なる分子として居るのであるが此の志願には二種有る。其の一は現役志願と云つて年齢十七歳以上に達したものが徴兵検査の際身體検査を受け合格證書を貰ひ九月十日迄に鎮守府に願ひ出づるので有る。詳細は市、區、町、村の兵事係に聞けば手續はして呉れる。其の入團は矢張徴兵と同じく毎年十二月一日にするを通例とする。其の二は單に志願兵と云つて志願せんとする者自進んで海兵たらんことを志望し永久海軍に居て御奉公致すと同時に何か一廉の技術を修めんとする壯丁から身體検査をなし且學力試験をなしたる上

採用せらるゝのである。而して入團は毎年六月一日で現役六ケ年である。

此の外に徴兵と云つて普通の徴兵検査に於て海軍々人となるのもある。之は普通の徴兵検査に合格した壯丁中より採用するので検査の際徴兵官に對し自分は海軍志願で何兵種を志望する旨を口頭で陳述するのである。徴兵官は其の適否に應じて採否を決定するので入團は毎年十二月一日で現役は四ケ年である。

以上の如くであるが故に帝國海軍兵は大別して志願兵、徴兵の二種が有ると云ふこととなるのである。

海軍志願兵採用年齢左の如し。

水兵、機關兵、十七年以上二十一年未滿。

軍樂兵、十六年以上十九年未滿。

船匠兵、看護兵、主計兵、十七年以上二十六年未滿。

備考。

- 一、年齢の計算は採用さるべき年の一月三十日に於けるものである。
- 二、徴兵令により補充兵役及び國民兵役に在る者は海軍志願兵の徴募に應ずる事を得るも陸軍補充兵役に在る者にして一旦召集を受けたる者は志願することを得ず。
- 三、船匠兵志願者は一ヶ年以上大工或は指物師又は造船業に従事した當該市、町、村長の證明を得ることが必要である。

體格検査合格標準左の如し

身長 水兵、機關兵、看護兵の一般に就ては五尺二寸、十七年未滿に在りては、五尺一寸五分、十八年未滿に在りては五尺一寸七分

體重 水兵、機關兵、看護兵の一般に在りては十三貫、十七年未滿に在りては十二貫五百、十八年未滿に在りては十二貫七百。

胸圍、水兵、機關兵、看護兵の一般に就ては二尺六寸、十七年未滿に在りては二尺五

寸五分、十八年未滿に在りては五尺一寸七分

右は水兵、機關兵、看護兵に就ての合格標準なり。但し當分の間水兵、機關兵と雖も五尺以上の者を採用することを得。

船匠兵、主計兵、軍樂兵に就而詳細に教ぶることを省略するも之が概要は、身長五尺以上、體重、十二貫以上、胸圍、二尺五寸以上たることを要す。故に之に充たざるものは不合格である。

以上は志願兵に就ての合格標準であるが徴兵に在りては身長に些少の差異がある即ち次の如し。

水兵、機關兵に在りては志願兵一般五尺二寸なるに徴兵に在りては五尺三寸である。

船匠兵、主計兵の志願兵一般に在りては五尺なるに徴兵に在りては五尺二寸である。

體格検査に合格したるものに對しては次の様な科目に付き尋常小學校卒業の程度に於て試験を行はるので有る。規定は尋常小學校卒業の程度となつて居るけれども此の頃の海軍は朝の新式は夕の舊式となるが如く其の進歩の迅速なことは實に驚くべきであるが故に海軍々人たらんとする者は出來得る限り普通學の研究に努力されんことを望む、之が努力は自己の榮譽進達は云ふ迄もなく引いては國家の爲にも效與つて大なればである。

讀書、平易なる漢字交り文

作文、通俗文、

算術、四則、小數、分數、比例。

海軍を志願するに當つて最も考慮すべきことは一言にして言へば「適材適所」である。即ち自分は海軍々人中何の兵種に適合して居るか云ふことである。之を定めるのには前に述べたる所の各兵種の任務を能く讀んで之に自分の性格、體質等を對照して

能く考へた上で志願することが肝腎で有る。若此の選擇を誤れば之實に海軍々人としての第一歩を誤まれるもので有つて、自己の爲め將又海軍に及ぼす所の影響は甚大なものである。

海軍兵志願心得としては大略此の位のもので有るが今一つ特に心得べきことがある軍人に賜りたる左記五ヶ條の御勅諭である。

- 一、軍人は忠節を盡する本分とすべし、
- 一、軍人は禮儀を正しくすべし、
- 一、軍人は武勇を尙ぶべし、
- 一、軍人は信義を重んずべし、
- 一、軍人は質素を旨とすべし、

海兵團は各鎮守府に有るが徵募區に依つて、入團する海兵團が次表の如くに定まつて居る唯徵兵は陸軍の聯隊區に於て徵募せらるゝので必らずしも府縣別と一致しない

所も有るがそれは全國に亘つて僅かに數箇所に過ぎないので徴兵官の命せらるゝ所に従へばよい。其の他の徴兵は大體次表に依りて所轄鎮守府を定められるのである。

海軍志願兵徵募區	所轄鎮守府	所在地	廳府縣
第一	横須賀鎮守府	神奈川縣 (相模國)	北海道、青森、巖手、福島、宮城、千葉、栃木、群馬、埼玉、東京、神奈川、山梨、静岡、愛知
第二	吳鎮守府	廣島縣 (安藝國)	三重、和歌山、滋賀、奈良、大阪、兵庫、岡山、廣島、山口、鳥取、島根
第三	佐世使鎮守府	長崎縣 (肥前國)	大分、福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿兒島、宮崎、沖繩、徳島、高知、愛媛、香川
第四	舞鶴鎮守府	京都府 (丹後國)	秋田、山形、新潟、長野、富山、石川、岐阜、福井、京都

二七、社會から見た海軍 學友慶洋

陸軍を主とし海軍を従とす可きか、海軍を主とし陸軍を従とす可きかに就ては今日既に問題でなくなつた。只今日残されて居る問題と云ふのは「何の程度迄の海主陸従か」のみで有る。否夫さへ心有る者は已う問題にするには餘りに古いと言つて居る。海陸を並べて考へる事夫自身が既に比較を誤つて居るからで有る。然り。其は實際で有る。帝國の歴史を逆に繰る事五十年なれば其處に日本陸主海従最後の頁は見出さるゝので有つて浦賀灣頭高く鳴り響く一發の砲聲はよく三千年の長夢を破り澎湃として打ち寄する世界の思潮は遂に吾等の蹶起を餘儀なくせしめたのである。

河を隔て山を挟み隣郷近藩矛を執り弓を引いて相争ひし者も一度太平洋の彼方よりする黒暗々たる風雲を望み見たる時「兄弟橋に闖ぐ共外其の侮を禦く」と圍を解き陣を

變へ結束して外敵に當らんとしたのであつた。

けれ共其の風雲は吾々の考へた程性質の悪いものでも無ければ陸から見た程恐怖るべきものでも無かつた。寧ろ相共に手を携へて乗り切らねばならぬものだと思はれた。時日東の志士は彼等と覇を洋上に争ふ可く奮然として立ち上つた。則ち帝國は此の幕を陸主海従の大詰として廣い天地の新しい文明の中に躍り込んだので有る。

一轉機は來た。國民は等しく領域の擴張たる海洋に住居の延長たる船艦を要求し出した。即ち之に依つて自らが刻み着けた發展の足趾を徒勞にすまいとして有る。

斯ふして日本海軍は生れたので有つた。幾何も無きに善隣の誼破れて不幸老大國支那と干戈に相見ゆる所となるや彼等が東洋の所謂大艦隊も正義の前には及向ふべくも有らず旭旗の行く所敵影なきに及びて日本の日本は東洋の日本となり大八洲は更に海を隔て、一洲(臺灣)を加へ帝國海軍の責務は愈々重且つ大を加へて行つたので有る。越えて十年、世界地圖面の一粟粒たる我帝國は世界最大國露國に對し膺懲の軍を起

すやさしも歐亞に鳴らせし波艦隊も嵐の前の落葉と散りてより東洋の日本は一躍世界一等國の伍班に列し宇内の視聽を悉く一身に蒐むるの壯觀を呈したので有る。

斯くの如くにして區々たる東洋の一小國より洋々たる大世界に乗り出し、名乗をあげての一騎打戦法は變じて艦艦海を壓して相對するの大規模となり苟も世界を舞臺とし一國の威信を保持せんとするならば其の相當の海軍力を有するに非ざれば能はざる事となつた。

斯くの如くにして海軍擴張の議は起された日比谷原頭三百八十一頭顱を並ぶと雖もよく世界の趨勢と帝國の前途を洞察し得たる議員幾人か有りし。吾人は衆議院傍聽席に在りて此の態を見切齒扼腕して時勢を慄いたもので有る。

時代は推移し要求の一切は容れられた。全歐の平和一度破れて同盟の糸に東に牽かれ遂に我帝國の宣戰となる。硝煙彈雨の五年間若し我が海軍のより微力なりしならんには南洋に地中海によく彼の戦功をたて得たりしや如何。假りにたて得ざりしとせば

列國間に於ける日本今日の地位如何。思ふて茲に至れば吾等滿腔の感謝を拂はざる可からざるに而も尙ほ某博士の如きは吾等に「戦艦一隻の費はよく大學數校を建て得べし」と言へり。吾等最高學府に籍を置く者、其の隆昌を希はざるの理なし。然れ共物各々本分有り。博士に反問せん「大學より敵艦を剿滅し得るや」と又或實業家は言へり「軍費一年は能く吾等の諸税を半減することを得べし」と借問せん「實業家能く國防の重任を果し得るや」と。

軍費制限も可、經費節限も可。唯夫れ時勢を知れ、世界の太勢と帝國の現在を思はずして如何に大言壯語すとも其、千言萬語何等蛙鳴蟬噪と選ぶなけん。今日の時代は空虛なる論争の時代に非ずして着實なる實行の時代なりと知らなければならぬ。

恩に馴るれば思ふに疎しと。海軍常に我を大にし我を強くす。而も人多く之を思はず。吾等不幸にして海軍に暗しと雖も亦幸にして學友に川村庄助君を有し、義弟に川上善次郎を有す。共に海軍に身を委ぬる者、僅に智識を此の兩者より得て愈其の

重要を悟り一層の囑望と期待とを有つて止まぬ者である。

時しも著者の此の企あり、特に卷末を割いて余に與へ「露骨に正直に「社會から見た海軍」を草せよと望まる。門外漢が見當違ひの弓を引き出し知つたか振りの矢を番ふ。夫れが何の位迄外れるかは兎角とし、要するに「世の中には海軍を斯く見ている者も有る」と言ふ事を知つて貰ひ度さに秃筆を呵して數頁を埋む。釋尊にして尙ほ他人の説法に耳を傾けられしと云ふ。希ふ暫く説法を聴く釋尊たられよ。

(一)海軍は超越して居る。吾等の見を以てするならば陸軍と異い海軍は浮世を超越して居る様に思はる。蓋し吾等の容易に接し得ざる場所に、吾等の容易に覗ひ得ざる生活營むが爲めで有らふ。併し又彼の海軍々人の服装所作の暢びりした飾らぬ點より築き立てられた此の觀念で有ることも承認せずばなるまい。

人間と云ふものが小さい地域で軒のつき合せてウヨ／＼して居る事を海軍では如何に醜いものに見るで有らふ。と思ふ程陸上の吾等は世界と言ふ大きいものを相手に海

洋と云ふ庭で育てらるゝ海軍を羨しく思ふ。斯う考へて來ると海軍が超世間的で有ると云ふことは必然の事だと云ふ結論に達してしまふ。そうなるると海軍々人は吾等の家が歩き出さぬにもどかしがつたり、吾等の怖るゝ地震が海洋の波浪の様に始終起らぬ事を物足りなく考へられはすまいかとさへ想像し度くなつてくる。

斯ふした時何時も吾れ〜が思ひ起すのは彼の社會の耳目たる新聞の事である。迅速で正確な報道を怠るまゝとして毎日々は愚朝刊、夕刊、夜間、而も急を要するものは彼の鈴の音勇ましき號外となつて吾等に親しむが之を海軍にして見ると場合に依つては一週間に一度も手に入らない時もありはすまいか。然ふした折海軍々人と云ふものは吾等の社會から遠くかけ離れた海上の一國として特殊の取扱を受けるのでは有るまいか、其廢事は屹度屢々起ることに相違ない。左様考へて來ると什ふしても海軍は浮世離れがして居る。

(二)併し海軍は融通が利かぬ。彼の圖太いそして黒ずんだ軍艦が打つとも擲るともチ

ンとさへ云はぬ純感な五體をノソリ〜として動き出す時吾等は田舎の牛の事を思ひ出す。従つて其廢物の内に起臥する海軍々人は敏捷な自由な事は餘り香ばしく思はれないでノタリ〜する春の海をきまつたことを根氣に繰り返してさへ居ればよいのである。だから其の修むる所は悉く幾何學的で有り、其の練る所は悉く杓子定規である。其の眼は世界に廣いけれ共其手は一定の物を離れ得ない。とすれば融通性を缺かねば本當でないことになる。例令吾々の此の考へが間違つて居るにせよ之を覆す可き事實は餘りに吾々の目に遠きが故に此の想像が遂に海軍の全體を築き上げて了ふとして多くの人は之を正しいものに獨り定めて居るものが社會の大部分である。

(三)其の代り海軍々人は豪膽である。陸軍が練兵場を區切るに對し、海軍は世界を股にかけることは直ちに以て海軍軍人の氣早を濶達にする。何方向いて見ても渺茫たる大洋は狭い五體に蟠まつて居る精神ををびき出して物にかまけぬ磊落な人間を作り上げる。又自然の成り行きと云はねばなるまい。



(四)併し亂暴である。若し陸軍々人と海軍々人とが一軒の掛茶屋に小憩したとする。すると其の茶屋の主人は軍港地ならいざ知らず、で無い限り孰れに馴れくしい口を利くかと言ふと無論陸軍に有る。縦し海軍に話すとしてもある溝を隔てと云ふものを置くことを忘れないであらふ。元より見馴れない故も有るが又一つは「海軍さんは亂暴だ」と陸の上の通り文句に禍されて有る。「若し悶着が起つたら」と考へると、陸軍なら直ぐ營所が有るから好い様なもの、海軍は一體何處に如何して居るやら見當さへ着かぬ。偽らぬ告白をするならば陸の者は時々此の苦い經驗を嘗めて居る。所謂海軍ナイフが上手に疊の縦糸を寸断して居たり割合に廣い洋袴の裾が卓子の脚に搦みつくと共に地響き打つて轉がり廻る等は餘りに多過ぎる實例で有る。

(五)海軍は贅澤で有る。あの小奇麗な着物にこじんまりした短靴を穿いてそれで食べる物が朝は味噌汁で晝は肉、晩は魚と聞いては今日中流以上の家庭でも及ばぬ觀がある。吾々が珍らしがる罐詰なんかは天から相手にしない點に於て其の灰殻さを知る事

が出来やう。

(六)併し海軍は給與が薄い。國家の干城とか云つて精一杯抱え上げる社會の者が、干城と勘定とは別として頓着しない所に所謂人間の我儘氣儘根性が現はれて居る。特に余が海軍に給與が薄いと言つてには理由が有る。毎日々々行く所は練兵場が雜木山の中の陸軍、に違ひ今頃の學者、政治家連が一度は濟まして舶來のレットルを得ようと夢の中迄脊負ひ込むあの洋行が、此の兵隊さんには朝飯前で寧ろ行かないのが不思議と云ふのが海軍の有様で有る。鎮守の御祭でさへ「それお小遣だよ」と與へるので親心而も航程一萬哩、昨の桑港、今の倫敦、旭旗を朝風に颯らせつゝ世界を駆け巡らねばならぬに對し航海加俸とか云ふ涙程の思召し以外は却而陸軍より低いと云ふに至つては吾人甚だ恠まざるを得ないので有る。然るに幸なる哉四十一議會に於て給與が大分改善されて缺陷を補充することが出来たがまだ之を以て完全なりとは云へないのである。即ち時代の推移に伴ふて給與も進んで行かなければならないのだが今日の處で

は國家財政上止むを得ないのならまあ當分辛抱して貫はなくてほなるまいが併し「甚だ輕薄だ」と云ふ事丈は吾々の頭に覺えて居る事であるから何時か諸君に満足を得さしめねばならぬ。

(七) 實社會との連絡が無い。現に海軍々人一度除隊となれば現役中に得た智識と技能とは此の實社會に幾多活用の機會有り乍ら連絡を缺ける事は遂に適材を適所に容るゝ能はず所謂實の持ち腐りとなりて塵事に朽ち果つる事少しとせざる所である、例へば運用下士に運轉士の免狀を與ふれば直ちに用を爲すに八釜しき手續に依りてのみ之を與ふるがために人多く其繁を厭ふて之に就かざるが如き其れである。之管に本人の損失のみならず國家の人物經濟上大なる損失と云はねばならぬと思ふが果して如何に。

(八) 海軍は粹である。誰に言はせても異口同音「陸軍は野暮だが海軍は粹である」と云ふ。實際だ陸軍のどの男を捕へても無骨で頑固で隠し藝としても「廻れ右向き前へ廻れ」位か關の山だが海軍は何麼男でもダンスの眞似位は心得て居て時々變な所から

黄ろい聲を絞つて居る事を耳にする。併し「粹が身を食ふ」で「行く先きや我が家で女郎が妻」なんて唄つて平氣に澄したものの。其の癖「水兵さんなら嫁に遣らふか」杯云ふ親の心も分らぬは分らぬが。

(九) 海軍は開放的である。陸軍の營所と云ふ所は年に一回も漸く見せる位だが海軍は其處に行くと「一所に祝ひませう」と云ふ主義で祭日等にはどしどし入れて見せる所が嬉しい實に有り難く感ぜられるのである。

(十) 海軍は家族的である。之は特に余が氣持ち能く感ずる所である。陸軍の將校と下士官、兵が出逢つた時と海軍の將校と下士官、兵が出逢つた時とは其出逢つた瞬間の態度應答が一目で讀める位違つて居る。嘘だと思ふなら實際氣を着けて見たら好い。余は正直である。川村君が露骨に言へと言つたから夫を眞に受けた爲め管らぬことを言つて了つた。併し他人から見ても間違つた點が有つたにせよ余自身の心には一點の偽りも無い事を表明して此の記を結ぶもので有る。

二八。海軍の賜

海軍の賜と云へば誰しも直ぐに自費で行けば何百圓何千圓と云ふ恐しい多くの旅費のかゝる日本漫遊は愚か世界漫遊が無一文所かあべこべに俸給をもらつて行くことが出来田舎に閉ぢ籠つて居ては寫眞は愚か夢にもよう見ない様な美しい景色や有りと所有奇觀を極めた外國の大都會を見ることに一番太い指を屈るであらふ。之は日本漫遊や世界漫遊の所で大分書いて置いたので充分御承知の事であらうと思ふ。又餘り丈夫でなかつた躰が海軍に行つて鍛ひ上げた御陰で大變丈夫になる事等何人も心づく所で又海軍の賜としてもかなり大なる事では有るが尙ほ海軍の賜として世人は餘り氣付かないけれども中々見通してはならない大きな賜がある、それはとりもなをさず精神上に齎す賜であつて直接にこそ氣づかないけれども人間位い周囲の状態に感化され易いものはない。昔から「朱に交れば赤くなる」と云ふ諺の傳つて居る通り我々は交る

周圍に應じて知らずくの間に變化しそれが悪いものであれば同じ様に悪くなり又良いものであれば自然に良い方に導かれて行くものである、海軍内では御承知の通り規律が中々嚴格なので海軍に入る前はだらしがなくて仕方が無かつた人が満期後見かへる様に引きしまつて來ると云ふ事等能く世間にある通り例である、又海軍に於ては何事によらず輕卒に流れるを非常に戒め寸分たがはず正確にすると云ふことを貴んで居るので海軍満期兵は物事に當つて何處となくしまりが有る。又海軍に於てはいくら小さい仕事であつても皆國家の仕事であるから従つて其責任は非常に重いこと、自然責任觀念が誠に強くなり、物事に對して敏捷快活を伴ふ判斷を必要とする所から所謂軍人共通の性質であるハキ／＼した所が出来、又軍人の寶とする度胸が据り、其の他忍耐力、共同心、同情心等一人前の人間として社會に立つには是非共無くてはならない大切な性格の殆ど全部は海軍に行けば知らずくの裡に備はり又海軍部内では有りと所有人間に接する所から勢ひ交際も上手になり一方之に伴つて常識も非常に發達し

て來るのである、故に社會に出て後も自然他人から厚い信用を受ける事が出来る。之も資元を質せば海軍生活の賜である。故に今後社會に出でて一花咲かしてやろうと云ふ氣力のある青年諸君が社會に立つ準備をするに海軍は誠に眺へ向きの處であることとを僕は自分の經驗上から割り出して斷言するを憚らないものである。現に獨逸では一度軍隊生活を済まして來ないうちには決して社會上重要な位置に用ひられないやうである。されば今後社會に立ちて世の落伍者となるを欲せず少くとも人の頭に立ち一仕事しようと云ふ意氣の有る頼母しい青年に對しては僕は實社會の豫備校とも云ふべき海軍生活を是非一度せよと極力御勸めする次第である。

昔から「猫にコバン」とは能く人口に膾炙された諺であるが世の現役諸君は海軍生活の如何に他日實社會に立つに際し有益なものであるかを能く自覺し「コバン」に對する猫とならない様又折角寶の山に入りながら無一物にして歸るが如き愚を敢てしない様に、一方青年諸君は一日も早く此の寶の山に分け入つて天晴光り輝く玉の枝を手折り

光榮ある桂の枝を戴いて社會に出でられんことを折り返し茲に希望して止まない次第である。

二九、質問に答ふ

地方壯丁にして海軍の内情を知らんとするも兵事係にて詳細を知ること出来ざる爲め遺憾とする所少なからず。如此は其當人は勿論引いては我が海軍の爲め將國家の爲めにも誠に惜む可き次第で有る。此の情態を聊かたりとも救済するの意に於て返信料のみを以て極力便宜を圖る可く又著者の辨へざる事項は之を海軍省に質し諸君の満足さるゝ様努力する覺悟なるが故に何事も御遠慮無く御質問有らん事を望む。

三〇、官名の新舊對照

新官名								舊官名							
同	同	同	同	同	同	同	海軍	同	同	同	同	同	同	同	海軍
少	中	大	少	中	大	少	中	少	中	大	少	中	大	少	中
尉	尉	尉	佐	佐	佐	將	將	尉	尉	尉	佐	佐	佐	將	將

同 同 同 同 海軍 同 同 同 同 同 同 同

二等機關兵 一等機關兵 三等機關兵曹 一等機關兵曹 兵曹長 少尉 中尉 大尉 少佐 中佐 大佐

同 同 同 同 海軍 同 同 同 同 同 同 同

二等機關兵 一等機關兵 三等機關兵曹 一等機關兵曹 上等機關兵曹 少尉 中尉 大尉 少佐 中佐 大佐

同 海軍機關 改正削除 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

少尉候補生 兵曹長 一等兵曹 二等兵曹 三等兵曹 一等水兵 二等水兵 三等水兵 四等水兵 中將 少將

同 海軍機關 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

少尉候補生 上等兵曹 一等兵曹 二等兵曹 三等兵曹 一等水兵 二等水兵 三等水兵 四等水兵 五等水兵 中將 少將

同	同	同	海軍主計	改正削除	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
中	大	少	中		四等看護兵	三等看護兵	二等看護兵	一等看護兵	三等看護兵曹	二等看護兵曹	一等看護兵曹			
佐	佐	將	將											
同	同	海軍主計	同	海軍主計總監(中將相當)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
少	中	大		(少將相當)	五等看護	四等看護	三等看護	二等看護	一等看護	二等看護手	一等看護手			
監	監	監												

海軍	同	同	同	同	同	同	同	海軍軍醫	改正削除	同	同
看護兵曹長	少尉	中尉	大尉	少佐	中佐	大佐	少將	中將		四等機關兵	三等機關兵
同	同	同	海軍	同	同	海軍々醫	同	海軍々醫總監(中將相當)		同	同
看護師	少軍醫	中軍醫	大軍醫	少監	中監	大監		(少將相當)		五等機關兵	四等機關兵
										三等機關兵	

同	同	海軍	海軍船匠	同	同	同	同	同	同	同	同	海軍造船
三等船匠兵曹	二等船匠兵曹	一等船匠兵曹	兵曹長	少尉	中尉	大尉	少佐	中佐	大佐	少將	中將	海軍造船總監(中將相當)
同	同	同	海軍	同	同	同	同	同	同	海軍造船	海軍造船總監(少將相當)	
三等船匠手	二等船匠手	一等船匠手	船匠師	少技士	中技士	大技士	少監	中監	大監			

改正削除	同	同	同	同	同	同	海軍	同	同	同	同	同
四等主計兵	三等主計兵	二等主計兵	一等主計兵	三等主計兵曹	二等主計兵曹	一等主計兵曹	兵曹長	少尉	中尉	大尉	少佐	海軍
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五等主計兵	四等主計兵	三等主計兵	二等主計兵	一等主計兵	三等主計兵	二等主計兵	一等主計兵	上等主計兵	少主計	中主計	大主計	
主尉	主尉	主尉	主尉	主尉	主尉	主尉	主尉	主尉	主尉	主尉	主尉	



同	同	同	海軍	海軍軍樂	同	同	同	同	同	海軍水路	同
一等軍樂兵	三等軍樂兵	二等軍樂兵曹	一等軍樂兵曹	兵曹長	少尉	中尉	大尉	少佐	中佐	大佐	少尉
同	同	同	同	海軍	同	同	同	同	同	海軍水路	同
一等軍樂生	三等軍樂手	二等軍樂手	一等軍樂手	軍樂師	少技士	中技士	大技士	少監	中監	大監	少技士

同	同	同	同	同	同	海軍造兵	改正削除	同	同	同	同
中尉	大尉	少佐	中佐	大佐	少將	中將		四等船匠兵	三等船匠兵	二等船匠兵	一等船匠兵
同	同	同	同	海軍造兵	海軍造共總監(少將相當)	海軍造兵總監(中將相當)	同	同	同	同	同
中技士	大技士	少監	中監	大監			五等木工	四等木工	三等木工	二等木工	一等木工

同	二等軍樂兵	同	二等軍樂生
同	三等軍樂兵	同	三等軍樂生
同	四等軍樂兵	同	四等軍樂生
改正削除		同	五等軍樂生

尙今回の改正により兵科、機關科、看護科、主計科、船匠科、軍樂科には夫々特務少尉、特務中尉、特務大尉なる新制度設けられ、海軍特務大尉、海軍機關特務大尉、海軍看護特務大尉、海軍主計特務大尉、海軍船匠特務大尉、海軍々々樂特務大尉の如くである。

以上の外に海軍藥劑少尉より同大佐迄海軍造機少尉より同中將迄有り。豫備となつた場合は豫備の二字を附す。例之海軍豫備中佐海軍豫備少尉海軍豫備一等兵曹と云ふが如し。

三二、海軍の主なる官廳並びに其の當局

海軍大臣	海軍大將	加藤友三郎
海軍々々令部長	海軍大將	山下源太郎
横須賀鎮守府司令長官	海軍大將	山屋他一人
吳鎮守府司令長官	海軍大將	村上格一
佐保鎮守府司令長官	海軍大將	財部彪
舞鶴鎮守府司令長官	海軍中將	佐藤鐵太
第一艦隊司令長官	海軍大將	榑内曾次郎
第二艦隊司令長官	海軍中將	鈴木貫太郎
第三艦隊司令長官	海軍中將	小栗孝三郎
練海艦隊司令官	海軍少將	齋藤半六

旅順要港部司令官  
 鎮海要港部司令官  
 大湊要港部司令官  
 馬公要港部司令官  
 海軍艦政本部長  
 橫須賀海軍工廠長  
 吳海軍工廠長  
 佐世保海軍工廠長  
 舞鶴海軍工廠長  
 海軍教育本部長  
 海軍大學校長  
 海軍兵學校長

海軍中將 中野直枝  
 海軍中將 山路善  
 海軍少將 布目滿造  
 海軍少將 谷口尙真  
 海軍少將 岡田啓介  
 海軍中將 山中柴吉  
 海軍中將 森山慶三郎  
 海軍中將 木村剛  
 海軍機關少將 平塚保  
 海軍大將 野間兼雄  
 海軍中將 加藤寬治  
 海軍中將 千坂智次郎

海軍機關學校長  
 海軍砲術學校長  
 海軍水雷學校長  
 海軍々醫學校長  
 海軍經理學校長  
 海軍潛水學校長  
 海軍運用術練習艦長  
 橫須賀海兵團長  
 吳海兵團長  
 佐世保海兵團長  
 舞鶴海兵團長

海軍機關中將 船橋善平彌  
 海軍少將 佐藤阜藏  
 海軍少將 吉川安平  
 海軍々醫少將 西勇雄  
 海軍主計少將 深水貞吉  
 海軍少將 今泉哲太郎  
 海軍少將 山口傳一  
 海軍少將 勝木源次郎  
 海軍少將 古川弘  
 海軍大佐 井出元治  
 海軍大佐 橫地錠二

(大正十年九年現在)

三二、我が海軍の現役大將

元帥海軍大將子爵	井上良馨	鹿兒島	七十六歲
元帥海軍大將伯爵	東郷平八郎	鹿兒島	七十四歲
海軍大將男爵	齋藤實	仙臺	六十三歲
同	島村速雄	高知	六十三歲
同	加藤友三郎	廣島	六十歲
同	加藤定吉	静岡	六十歲
海軍大將	山下源太郎	山形	五十八歲
同	名和又八郎	東京	五十八歲
同	村上格一	佐賀	五十九歲
同	依仁親王	京都	五十四歲

同 同 同 同 同 同

(大正十年九月現在)

有馬良橘	和歌山	六十歲
山屋他	磐手	五十五歲
財部	宮崎	五十四歲
黒井悌次郎	山形	五十五歲
野間口兼雄	鹿兒島	五十五歲
桥内曾次郎	磐手	五十五歲

三三、奮闘の二兵士

海軍一等機關兵 井上莊之助  
海軍三等看護兵 松下泰治

一兵から兵學校、機關學校等に入つて將校に任せらるる制度は従前からあつたけれども事實入學した者は今日迄一人もなかつたのである。然るに此の度横須賀鎮守府から一等機關兵の井上氏が機關學校に、舞鶴から三等看護兵の松下氏が兵學校に何れも入學豫定となつて居る。一兵から將校養成の學校に入學すると云ふことは蓋し此の二氏を以て嚆矢とするのである。實に此の奮闘振りは兩氏個人の爲めには勿論又國家にとつても此の上もない名譽、此の上もない喜びである。今日迄一兵より將校養成の學校に入學者の一人もなかつたといふことは、兵の努力の足らなかつた、怠つて居たといふの外はないのである。而し此の度の二氏の努力によつて兵の眞價も認めらるゝに至

つた。

兩氏共に勿論規定の試験に合格立派に入學豫定の一員、來る十二月夫々入學するのである。殊に井上氏の如きは小學校を卒へた丈で中等教育は中學講義録によつて入學準備をされたとのことである。實に此の努力に至つては心から敬服すべき點が多々ある、之が爲めに下士官、兵及び地方青年に與ふる印象、激勵は偉大なもので到底筆紙に盡すことの出来ない事柄である。

今更の様に云ふ迄もないが兵に對する制度をつくゝ考へてみると有り難いところがある。何となれば一兵から夫れ々學校に入つて將校になれ、又一方には特務士官の制度があつて特務大尉迄で進め其の上純然たる海軍少佐になることが出來尙ほも進んで其の人の技倆次第では海軍大將となり元帥に迄も累進することの出來る道が開かれたと云ふことは誠に結構な制度、茲に昔の制度を願れば一層有り難さ結構さが明る(昔の制度は事實に於て兵曹長(新制度に於ける特務少尉)迄で進み成績拔群の者

に限つて現役の時名譽中尉に進級せしめられたのであつた。之は全く名の如く名譽許りの進級であつた。思茲に至つては新特務士官制度及び將校養成の學校、入學の實現する所迄に進んだことに對し感謝せずには居られないのである。

ヲ上、松下の兩氏に告ぐ。氏等の此の度の御入學を、御奮闘を我が大日本國民は奇蹟の一つに算へ之を遠く海外に迄も誇りとして恥ぢざらんものと信じて衷心より敬意を拂ひ感服措く能はざる次第である。兩氏共に將來多々益々邦家隆盛を期する意味に於て粉骨細心奮勵努力され折角自愛自重以て尙且つ文明の今日東亞の盟主として樹立すべき我が大日本帝國の海軍下士官、兵の向上發展、助長に努められんことを切に望む。我が海軍下士官、兵は兩氏の如き人物を其の間隙間より出したることを無上の光榮、無上の譽とし又無限絶大の力と頼むものであると云ふことを茲に斷言すると同時に今日迄經來つた兵生活の情味を永久に忘却せざる様換言せば部下の心事を諒察思ひやると云ふことに心を措かる様、兩氏を思ひ大にしては我が海軍、國家の爲め敢而此

の苦言を提し兩氏の此の度の御奮闘御成功の一步に對する祝辭に代へる次第である。幸に兩氏よ斯く叫ぶ余の眞意を心の奥深く解され！

終りに兩氏の丈夫健闘益々御隆盛併せて御多幸を祈りつゝ、

(註)兩氏の御奮闘振りに感服し衷心より之を江湖に紹介せんと以上を掲載した次第である。此の事の余の耳に入りし時は既に拙著は印刷に着手して居た様な都合で卷末に載するに至つたことを甚だ遺憾とすると共に御斷りする次第である。幸に諒されよ。

大正十年九月十四日發行

潮の華

定價金壹圓九拾錢

東京市神田區仲猿樂町五番地  
海國同志會本部

川村庄助

發行者 星嘉吉

芝區愛宕町二丁目壹番地

印刷者 松井勇

芝區愛宕町二丁目壹番地

印刷所 松井印刷所

發行所

大賣捌所

東京市神田區仲猿樂町拾七番地  
振替東京五七三八〇番  
東京市神田區表神保町二番地  
東京市神田區表神保町三番地

星風堂

有精堂書店  
東京堂書店

318

462



終

